

平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題

自立をめざし、生き生きと学ぶ生徒の育成
～「確かな学力」の定着を図る指導法の工夫～

今年度の具体的実践の重点「学力向上を目指した言語活動の実践」

2 研究の概要

ア 全国学力・学習状況調査の結果における特徴と分析

本校の生徒の特徴は、質問紙からの傾向として、本年度は規範意識が高く、生活習慣も身につけてきているが、自尊感情をもてない生徒が多くいることがわかる。また、学習においても全体的な傾向は全国に比べ大きな差異はないが、「読む」、「書く」、「話す」の基本的技能及び既習事項の習得が十分でなく、それに伴う思考力や表現力にまだまだ課題がある。数学や理科への興味関心が全国平均を下回っており、数学では「数学的な技能」「資料の活用」の項目、理科では「知識理解」の項目が全国平均より大きく下回っている。基礎基本の習得と学習の基礎となる生活習慣の確立と家庭学習などの学習習慣の定着が求められる。

イ 学力向上に成果のあった取組

<具体的な取組>

① 授業力アップ

- (ア) 生徒一人一人の「学ぶ力」を高めるためには「授業規律」が必須であると考え、平成25年度から、生徒会・学習委員会が「授業の構え8ヶ条」を作成し、全校統一した授業規律のもと、学ぶ力の向上を図ってきた。本年度から学区小学校2校との小中連携の一環として、小学校でもこの「授業の構え8ヶ条」を周知し、中1ギャップをなくすひとつの取組とした。
- (イ) 平成26年度からは「教師の構え8ヶ条」を作成、職員室内に掲示し、職員の授業力アップに努める。特に、今年は、この授業でこれだけは理解させたい内容を明確に提示し、わかりやすい授業を展開した。

授業の「構え」8ヶ条

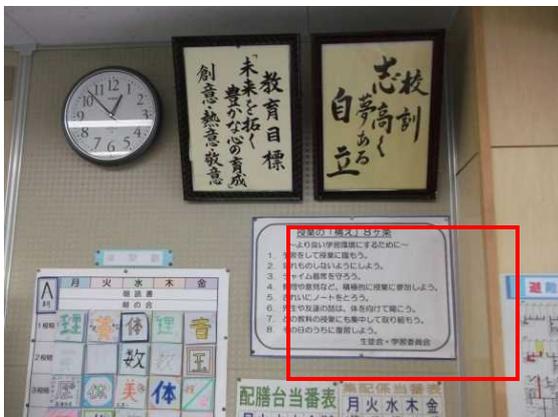
～一人一人の“学ぶ力”を高めるために～

1. 予習をして授業に臨もう。
2. 忘れものをしないようにしよう。
3. チャイム着席を守ろう。
4. 質問や意見など積極的に授業に参加しよう。
5. わかりやすく工夫されたノートにしよう。
6. 先生や友達の話は、体を向けて聞こう。
7. どの教科の授業にも集中して取り組もう。
8. その日のうちに復習しよう。

教師の「構え」8ヶ条

～生徒の学力を向上させるために～

1. 教材研究を十分に行い、授業に臨もう。
2. チャイムで授業を始めよう。
3. 授業で押さえるべき内容を明確にしよう。
4. 発問は「わかりやすく」「簡潔」、生徒の反応を逃さずに。
5. 生徒が復習しやすい板書にしよう。
6. 積極的に言語活動を取り入れよう。
7. 次時の学習内容を予告して、チャイムで授業を終えよう。
8. 自分の授業を評価・反省し、次にいかそう。



- (ウ) 生徒が学習の見通しをもてるように、学期や単元ごとの学習の予定と評価計画を配付し、1単位時間ごとの目標を明確に提示して授業を展開した。
- (エ) 教科・学年を越えた相互授業参観を行い、教員の授業力向上を図った。
- (オ) 数学や英語、理科、保健体育を中心に、少人数加配教員や少人数教育推進教員(市費)と連携し、わかりやすくきめ細やかな授業を展開した。

② 家庭学習の習慣化

- (ア) 学力の向上には、予習・復習が不可欠であると考え、全校一斉に「家庭学習ノート」を作成し、5教科の学習内容を1日1ページ以上学習し、毎日提出させる取り組みを行った。
- (イ) 長期休業明けに、学習委員会が主催する漢字コンテストやスペリング(英単語)コンテスト、計算コンテストを実施し、知識の定着、家庭学習の習慣化につなげた。
- (ウ) 年度始めに、各教科で学習の仕方(スタディガイド)を配付し、「何のために学ぶのか」という基本を含め、生徒に提示した。今年度は「家庭学習の仕方」をより具体化し、家庭での予習、復習はどのような学習をすべきかを明確に提示した。
- (エ) 中学校区の小学校との連絡会で話し合い、「家庭学習の手引き」を学区の児童生徒、保護者に配付し、家庭学習の習慣化を図った。

(オ)「ちばのやる気」学習ガイドや「家庭学習のすすめ」を活用し、補習的な学習や発展的な学習など、生徒の習熟にあわせた課題を与え、家庭学習を促した。

③ 教科部会の充実

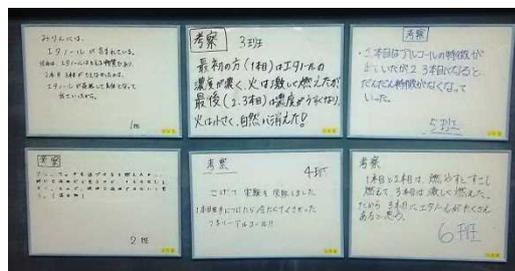
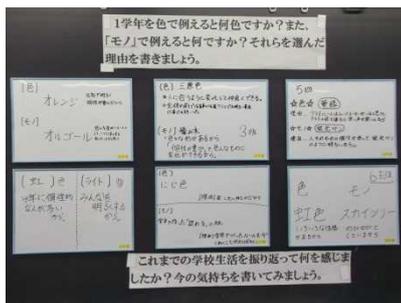
(ア) 週1回、教科部会を設定し、授業の進捗状況や指導法の検討、評価規準および判断基準の共通理解、学力テストの分析、各種アンケート結果の考察など教科部会の活性化を図った。

(イ) 生徒の実態把握のため、6月に「生活と学習のアンケート」、前期・後期の2回「授業アンケート」を実施し、授業改善を図った。

(ウ) 学習サポーターを活用し、放課後、数学の補習授業を3学年中心に展開することで、基本的技能及び既習事項の定着、それに伴う思考力や表現力の向上を図った。

④ 言語活動の充実に向けた取組

(ア) 1単位時間に小集団による教え合いや学び合いの場を設定し、積極的に言語活動を取り入れることで、本時の学習で身に付ける学力の定着を図った。⇒ホワイトボードの活用。



(イ) 思考力や表現力を高めるため、今年度の本校の研究方針の重点に「学力向上を目指した言語活動の実践」を掲げ、各教科で授業実践を行い、習得した知識や技術を活用することで一層の基礎基本の定着を図った。

⑤ 加配教員等の活用

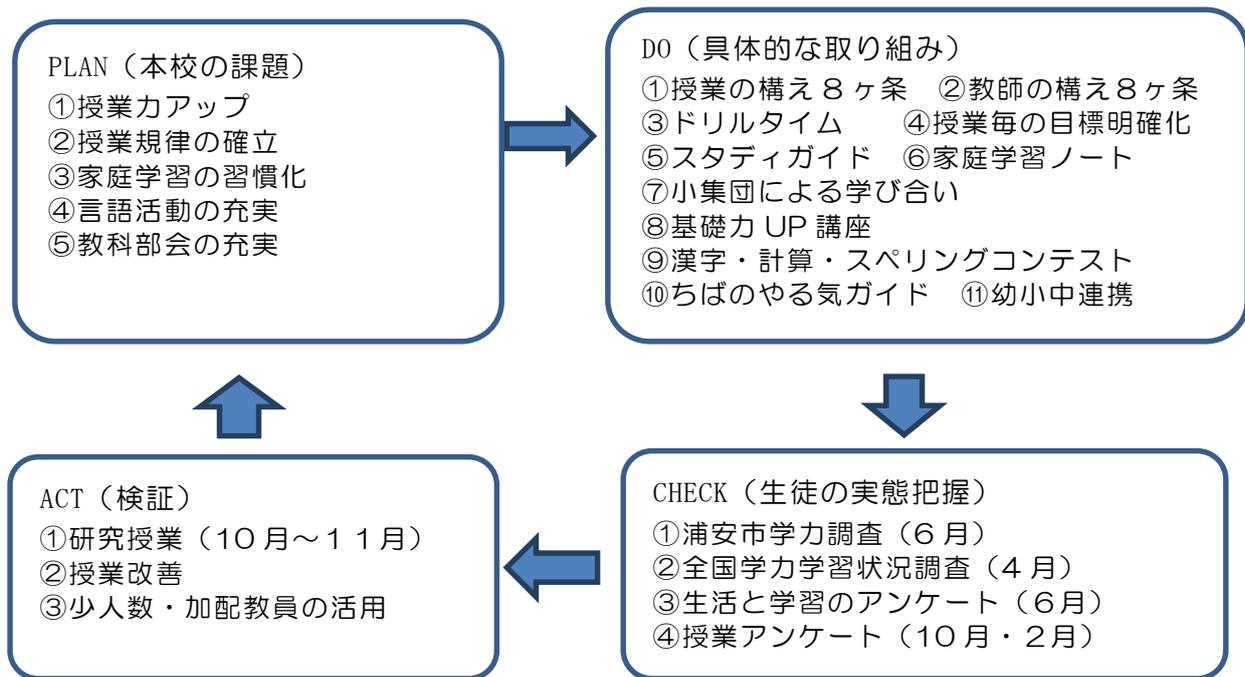
本校の課題である基礎基本の定着と、それに伴う思考力や表現力の向上を目指すには、特に数学や英語における少人数指導や習熟度別指導によるきめ細かな指導が必要であると考えている。3年間、県加配教員や学習サポーターを、少人数指導や習熟度別指導、放課後の補習授業で活用した。また、放課後の学習相談会で定期テスト対策授業を実施することによって、意欲的な学習の習慣化が図れた。

特に、学習サポーターによる補習授業(数学)では、個に応じたきめ細かな指導を行う

ことによって、基本的技能及び既習事項の定着、それに伴う思考力や表現力が向上した。成果を数値で考察すると、3年生で実施した習熟度テストの数学の平均点の向上も見られた。このことから、計算力の向上はもとより、関数など、数学的な見方や考え方が身につくにつれ、基礎学力の向上につながったことがわかる。

本校には、浦安市教育委員会より、英語科・保健体育科の少人数教育推進教員が配置されており、T.Tや課題別の少人数指導が行われている。

ウ 検証改善サイクル（P D C Aサイクル）



3 取組の成果と課題

ア 成果

① 「授業の構え 8ヶ条」を意識し、全体的に落ち着いた授業展開ができた

学習委員会で行ってきた「授業の構え 8ヶ条習慣化キャンペーン」では、どの学年も 8ヶ条の 8項目中 6～7項目が習慣化できている結果であった。項目の中の「チャイム着席」や「忘れ物をしない」など基本的な学習習慣の部分は達成率が高い。また「その日のうちに復習する」という項目は、家庭学習ノートの全学年実施で、達成率が高くなっている。

② 家庭学習ノートを活用し、家庭学習の習慣づけに向けた取組ができた

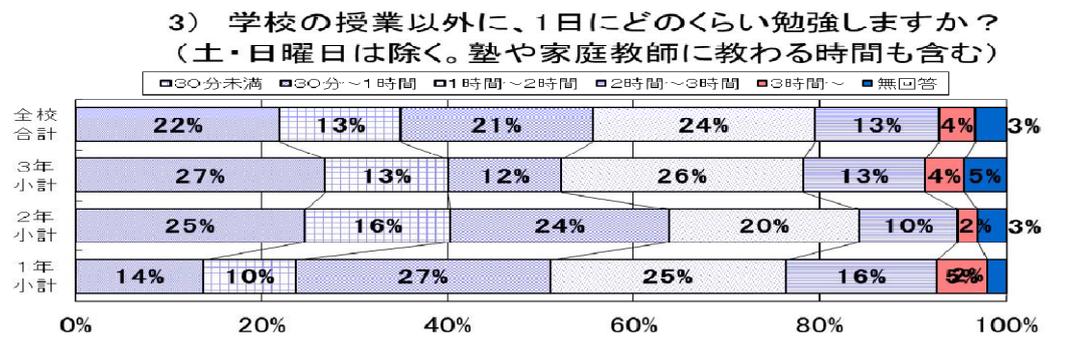
平成26年度から全校統一で取り組んでいる「家庭学習ノート」の提出は家庭学習の習慣づけの一助となった。学習委員会と学習係が連携して取り組んでいる「家庭学習習慣化キャンペーン」では、提出率が8割前後と、一定の成果があらわれた。

③ 「学習と生活のアンケート」や「授業アンケート」を実施し、考察した

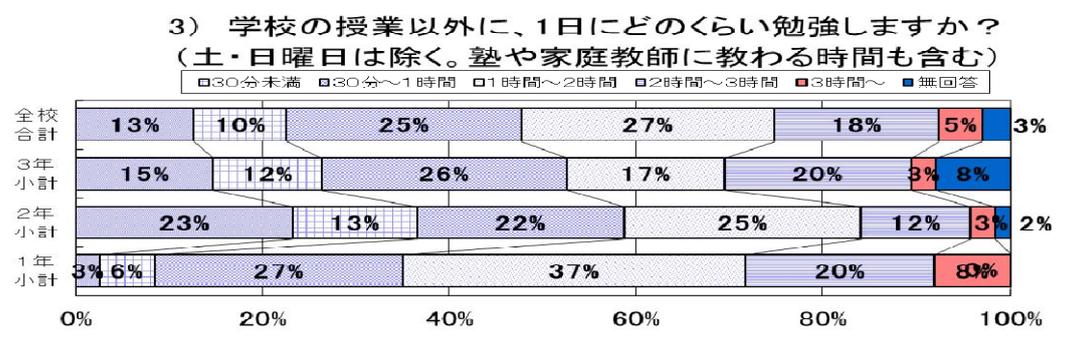
毎年6月に実施する「学習と生活のアンケート」では、2ヵ年連続で、平日・土日祝日ともに家庭学習が1時間未満の生徒が減少した。これは、「家庭学習ノート」の全校実施と、各教科部会で話し合った「達成感を持たせる宿題の出し方」によるものであると考えられる。今後も、教科部会中心にアンケート結果を考察し、日々の授業にいかし

ていきたい。

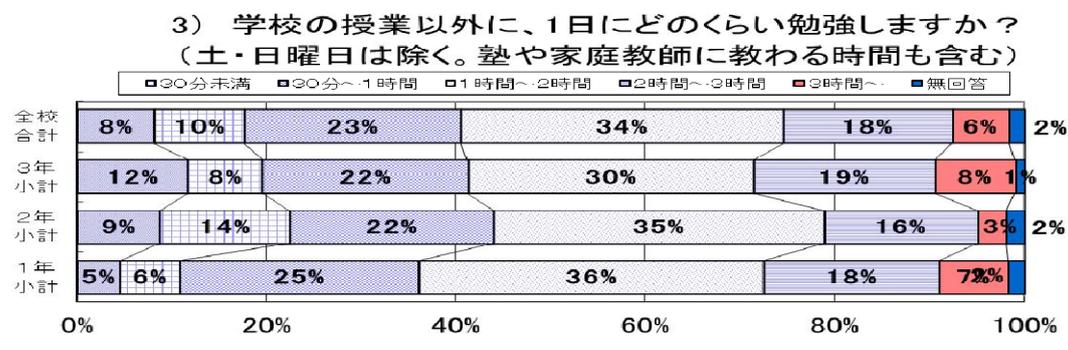
平成25年度



平成26年度

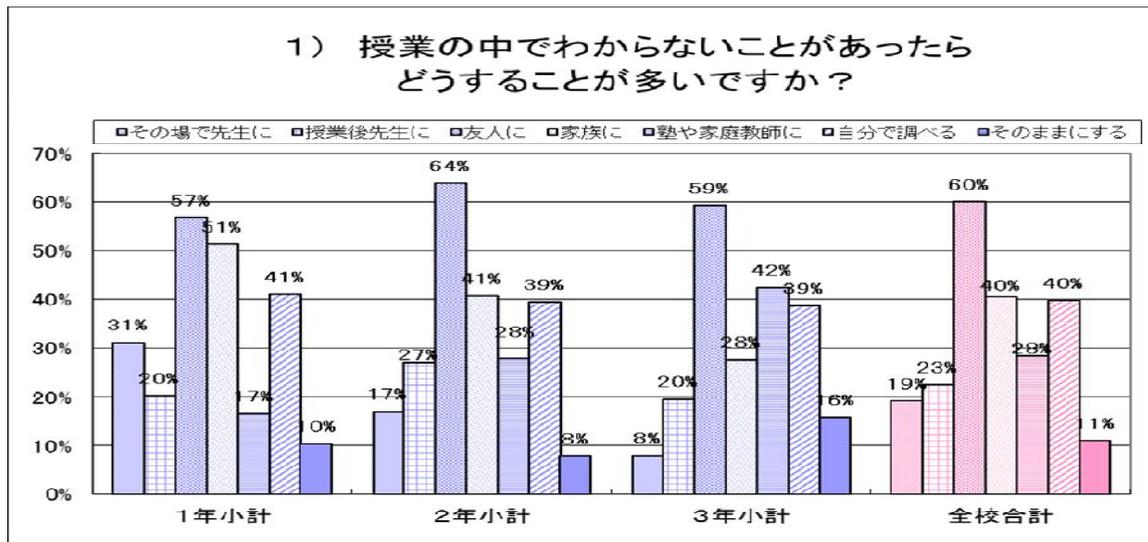


平成27年度



④ 生徒一人一人に対応した学習会を実施した

定期テスト前の「学習会」、学習サポーターを中心とした「補習授業（数学）」、校長の「基礎力アップ講座」、長期休業中に行われた「夏季学習会」・「冬季講習会」など、生徒一人一人に対応した学習ができた。また、校内の「生活と学習のアンケート」の結果から、授業でわからないことがあったらどうすることが多いか。」という質問に、本校では、「その場で先生に尋ねる。」「授業後先生に尋ねる。」と答える生徒が半数近くおり、教員と生徒の人間関係が良好であり、生徒の疑問をすぐに教員に聞くことができる環境こそ、本校の強みである。



⑤ 幼小中連携教育に力を入れた

中学校区にある幼稚園3園、小学校2校と合同の連絡会を年2回開催し、教職員が12部会に分かれ、具体的な実践を検討し、実践したものを評価する仕組みを確立した。中学校区のこども園・小学校と連携し、本校の課題である「家庭学習の習慣化」とそれに必要な生活習慣を身につけていく取り組みを地域ぐるみで行うことができた。校種を超えた授業参観や行事・文化交流も行われた。

イ 課題

① 授業の相互参観を一層推進する

学年・教科を問わず参観し、授業力アップに努めていく必要がある。学区小学校の相互授業参観も積極的に参加したい。

② 「教師の構え8ヶ条」を教員に浸透させる

生徒に8ヶ条を守らせる以上、授業者である教員も必ず8ヶ条を守れるように、徹底させていく。

③ 「教科部会の活性化」をさらに図る

本校は若年層の教員が多い。定期的に教科部会を開き、日々の授業や評価をおこない、授業力アップに努めたい。

④ 家庭学習の習慣づけに向けた取組を工夫して継続する

家庭学習に関する「予習をして授業に臨む」の達成率向上に向け、今後、委員会活動をさらに活発化させ、生徒の呼びかけを増やしていき、復習が定着してきた生徒を中心に、予習にも目を向けさせていきたい。また、「家庭学習ノート」について、クラス間や個人の提出率に差が出てきたのも事実である。今後、改善できるように学習委員の呼びかけを強化していきたい。

ウ 3年間の総括と今後の取組について

全国学力・学習状況調査の分析を3年間継続して行い、職員で分析し、授業に生かしていくという取組が、職員に浸透し、その調査結果を授業改善に生かすシステムが確立

できたことは大きな成果であるといえる。先生方の努力の結果、生徒の学習に対する意識も大きく変容してきている。生徒自身が考えた「授業の構え8ヶ条」のは堀江中の学力向上の指針として次年度以降も徹底させていきたいと考える。教員だけでなく、全校の学習委員会、学級の学習係の連携をさらに深めて、学習者である生徒自らが「自己の学力を高めていく」取組を続けていくことが必要である。

平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題

自ら学び、切磋琢磨する生徒の育成
～支え合いながら主体的に学ぶ学習意識を育てる～

2 研究の概要

ア 全国学力・学習状況調査の結果における特徴と分析

本校の学校教育目標は、「進んで学び、自他ともに高め合う仲間」である。また、研究主題は「自ら学び、切磋琢磨する生徒の育成 一支え合いながら主体的に学ぶ学習意識を育てる」である。

本校の生徒は、明るく朗らかで活力があり、秩序ある落ち着いた学校生活を送っている。教師の投げかけを素直に受け入れる風土がある。学校経営、学年経営、学級経営、生徒指導が有効に機能しており、授業態度は全体に良好で、まじめに学習する雰囲気がある。ところが、こうした姿勢が「テストの点」として結果に表れない。全国学力・学習状況調査でも、平均点より下回っている。国語では、知識問題に比べ、活用問題が苦手である。数学では、上位層が少ない。

そうした結果と目の前の意欲的な姿とのギャップに大きな問題意識を持った。そこで浮かび上がってきたキーワードが「主体性」である。

つまり、本校の生徒は「意欲的」に「前向き」に授業に取り組むが、「主体的」「能動的」には学習していないのではないか、という問題意識である。

「主体性」を持って学習に取り組み、自分で考えを深めたり、周囲と意見交換して考えを広げたり、といったことをしていないのではないか。思考し、考えながら学習を進めてはいないのではないか。

「自ら主体的に学ぶ」ことに着目して実践が始まった。

イ 学力向上に成果のあった取組

まず、基礎・基本の定着に主眼を置いた。特に下位生徒を対象とした取組を行った。平成25年度から平成26年度にかけてその成果が現れ、国語A、国語Bについては平均点に近づいた。さらに本校全体の向上を目指すには中位・上位の引き上げも必要だという分析がなされ、平成26年度はこのことも視野に入れて取り組んだ。例えば、それまで下位生徒のみを対象としていた「二川塾」（放課後を中心とした補習）を全生徒対象にし、習熟度別に編成して実施した。

3年間を通して、次のような実践を行った

- ・学習支援ノートの配布（家庭学習等で使うノート）
- ・総合学習（帯で取る基礎学習）
- ・二川塾（放課後の補習）
- ・土曜授業の有効活用（補習）
- ・シラバスの配付
- ・「学習の取り組み方」の冊子配付

野田市立二川中学校

また、小中連携をより有効に機能させ、共に児童・生徒の育成にあたった。

・小中連携事業

- いつでもふらっと参観
(時間があるときに予約なしに相互参観をする)
- 校内研修，授業参観時の相互参観
- 小中合同研修会
- 小学生対象 二川塾（小学生向けの補習）

一方で、教師の授業改善を第一に考えることがあらためて確認された。さらなる学力の向上を目指すために、授業改善を軸としながら主体的に学習に取り組む生徒の育成を図り、協働的な学習の場などを取り入れながら、思考力・判断力・表現力を高める試みを進めた。

スローガンにしたのは「主体的，能動的な学びを，協働的な学習の場で」である。授業力向上について協議するにつれ，教師の説明が多く，生徒が自分たちで考える場が少ないことに気づいた。そこで，授業改善として，生徒の問題意識，課題意識を啓発すること，協働的な学習の場を設定することが話し合われた。



二川塾（小学生対象）



協働的な学習の場

特に，学習指導案を2回書くことによって，授業力の向上を目指し，次のようなPDCAサイクルを確立した。

学習指導案の作成〔Plan〕⇒授業〔Do〕⇒指導，分科会〔Check〕
⇒授業改善〔Action〕⇒2回目の学習指導案の作成〔Plan〕
⇒2回目の授業〔Do〕⇒

分科会で話し合ったり，指導されたこと〔Check〕を，日々の授業改善につなげ〔Action〕，2回目の学習指導案の作成〔Plan〕に昇華するサイクルの回し方は，有効であった。

校内組織としては次のようなものを整えた。プロジェクトによってサイクルのスパンが違うため，総括的に行う年間のPDCAサイクルとプロジェク

ト独自のP D C Aサイクルが併用された。

- <総括> …全てを調整・総括
- <予算・会計> …予算関係全般
- ・総合学習プロジェクト … 「基礎・基本の定着」「思考力・判断力・表現力を伸ばす学習」を意識した総合Bの有効活用。確認テストの集計分析。
- ・学習支援プロジェクト … 「学習支援ノート」の質の向上。個に応じた支援方法の確立。
- ・実態分析プロジェクト … 「学習調査」の作成・集計・分析。
教職員・保護者・二川小学校の調査とリンクした調査の工夫。
全国学力・学習状況調査の分析。
HP等を活用した情報発信。
- ・教師力向上プロジェクト… 本校教職員の指導力向上を目指した取り組み。
若年層研修をはじめとする各研修。
シラバス・学習案内の作成配付。
- ・二川塾プロジェクト … スクリーニングテストにより抽出した下位生徒の放課後の補習。
土曜授業を活用した補習の充実。
個に応じた「二川塾」のあり方の検討。
小学生対象の「二川塾」。
長期休業中の「二川塾」の実施。

県より配置していただいた加配教員は、平成25、26年度は、本検証事業の校内担当者である教務主任の授業を一部受け持ち、また「二川塾」全体のコーディネーターを務めた。平成27年度は、校内担当者である研究主任の授業をサポートし、「二川塾」全体のコーディネーターを務めた。

ウ 検証改善サイクル（P D C Aサイクル）

全体で統一した検証改善サイクルは次の通りである。

- 年間計画の作成〔P l a n〕（4月）⇒実践〔D o〕（4～6月）
- ⇒検証〔C h e c k〕（6月）⇒改善〔A c t i o n〕（8月）
- ⇒年間計画の練り直し〔C h e c k〕〔A c t i o n〕（2月）
- ⇒新年度の年間計画の作成〔P l a n〕（4月）

他に、独自のスパンでP D C Aサイクルを回す場合があった。例えば、実態分析プロジェクトでは、調査を行う定期テストに合わせてP D C Aサイクルを回すのと同時に、早い時期に質問項目を確定する必要があったため、スタート時に検証改善が頻繁に行われた。

野田市立二川中学校

40%ほどだったのに比べて、半数以上が「自分の意思」で取り組み始めた。学習に対する意欲づけが自分で行える生徒の数が増えてきたことがみて取れる。実際、学習支援ノートの取組を見ても、自分なりの工夫をしている生徒が増えてきている。「協動的な学習の場」においても、自分の意見を言う生徒が増えてきている印象がある。

課題については、次のようなものがあげられる。

現在約半数の生徒は学習に「主体的」「能動的」になり始めた模様であるが、一方で、残りの半数の生徒は、まだ学習への意識が低い現状がある。ここを改善していくことが課題である。そのためにも、より「協働的な学習の場」を有効に活用し、主体性を高める努力が必要である。

また、学んだ勉強方法を定着、継続させることが必要である。一人一人の生徒の実態に合わせながら、習熟度別に、勉強方法の指導、アドバイスを行っていくことが求められる。

一方で、本校の取組の根本には「小中で連携し9年間で子どもたちを育てる」ことがある。近くにある両校ではあるが、日々の校務多忙の中、効率よく連携を進める手立てを考える必要がある。

年度があらたまって、職員も入れ替わった時の接続、つまり、年度を超えてPDCAサイクルがスムーズに回るための取組全体の共通理解、課題や目標の共有化を図ることも課題である。

今後も、学習への「主体性」の向上を目指しながら、その水準をより高いものにしていくよう支援するとともに、そのことと相まって、全国学力・学習状況調査などで具体的な成果が現れるよう、教師自らが切磋琢磨しながら、研鑽を積む必要がある。

1, 研究主題 「確かな学力を育むための指導のあり方」(3年計画)

—わかる楽しさ, できた喜びが実感できる授業で生徒の学習意欲を喚起しよう— (H25)

—学習スキルを向上させ, 自ら進んで学習に取り組む生徒の育成— (H26)

—話し合い活動を通して, 学び合う学級風土を醸成し, 学級集団を学習集団へと高めよう—
(H27)

2, 研究の概要

ア, 「全国学力・学習状況調査」の結果における特徴と分析)

(1) 本校の学力状況調査結果の分析から

①教科の調査結果にみられる特徴と現状分析

<国語>

正答率を全国平均と比較すると, A問題(知識)は全国平均・県平均を上回っていて良好な状況である。特に, 短答式の正答率はかなり高い。逆にB問題(活用)は全国平均をやや下回っており, 目的に応じて文章を要約したり, 要旨を捉えたりする設問で課題が見られる。記述式の正答率も低い。領域別にみると, 「書くこと」と「伝統的な言語文化(古典)」に関する事項は全国平均を上回り概ね良好だが, 対して「読むこと」は今後重点的に取り組んでいかなければならない課題の一つといえる。また, 「複数の条件を満たした作文」で, 条件を十分に満たした内容を記述することを苦手としている生徒が多い。国語で特筆すべき点はその無解答率の低さである。記述問題も含め, 全ての設問に対し「わからないから書かない。」という「無解答」率が極めて低く, 最後まであきらめず答えを出そうとする姿勢が伺える。

<数学>

正答率を全国平均と比較するとA問題(知識), B問題(活用)ともに, 全国平均をやや下回ってはいるが, この3年間の中では一番高い。B問題(活用)の正答率は比較的良好で, 昨年度よりも上昇している。一方A問題は特に関数に課題が見られる。また, 短答式の設問に対する正答率は高いが, 選択式設問に対しては課題がある。領域別にみると, 「数と式」という基本的な計算力は定着している。また, 平行移動した図形が描けるかどうかを問う設問では無解答者もなく正答率も大変高い。対して, 「資料の活用」は今後重点的に取り組んでいかなければならない課題である。情報処理能力を見る設問にも大きな課題が見られる。全体的にみると, 一問一答式の計算問題の定着率は良好だが, 文章から立式したり資料を読み取ったりすることの改善を図る必要があり, 領域によって大きな偏りが見られた。

<理科>

理科は全国平均をやや下回っている。また, 領域によって大きな偏りが見られる。領域別にみると「化学的領域」「生物的領域」の定着は良好で, 特に「化学的領域」は県や全国と比較しても大変良好である。対して, 「物理的領域」「地学的な領域」には大きな課題があり, 特に「地学的領域」の「天気図から風力を読み取る設問」「雲ができる成因に関する設問」などの正答率が低く, 「天気」の単元は重点的に取り組んでいく必要がある。

②質問紙の調査結果にみられる特徴と現状分析

<学校質問紙>

○項目によって取組に大きな差がみられ、本校の課題が浮き彫りになっている。

【職員研修・職員の取組】授業研究会の回数や学校外での研修会への参加、各教科における言語活動の取り組みが不十分である。

【学力向上に向けた取組】学校図書館を活用した授業は前年度よりも向上しているが、土曜日を利用した補充的な学習サポートの体制ができていない。また、一斉読書の時間も設けていないため、全国基準をやや下回る結果となっている。

【数学と理科の指導法】数学は補充授業は十分実施しているが、発展学習や実生活の事象と関連付けた指導を行う必要がある。理科は、補充学習・発展学習ともにその実施に課題があるが、特に発展学習や生徒に科学的な体験や自然体験をさせる授業を取り入れる必要がある。

<生徒質問紙>

○全国基準と比較し、本校の調査対象学年の生徒には以下の特徴が見られた。

【学習に対する関心・意欲・態度】教科によって関心意欲に偏りがみられる。

【学習状況】友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる生徒は多いが友達の前で自分の考えや意見を発表するのは苦手な生徒が多い。

【自尊意識】難しいことでも失敗を恐れなくて挑戦しようとする生徒は多い。自分にはよいところがあると思う生徒は、全国と比べて少ない。

【基本的生活習慣】1日当たり、(TV, スマホ, 携帯式)ゲームを4時間以上する生徒の割合が高い。また、1日当たりのメール, 通話, ネットに費やす時間が1時間以内という生徒も多いが、4時間以上するという生徒も全国平均と比べ目立つ。

【学習時間】学校がある日に、家で予習・復習をする時間は全国や前年度よりも高いが、休日の勉強時間は県や全国と比較して少ない傾向が見られる。

【地域との関わり】地域の行事への参加率はかなり低い。

【規範意識】「学校の決まりを守る」には、ほぼ全員の生徒が「はい」と回答していて、規範意識の高さが伺える。

○今回の調査を通して、本校の生徒は規範意識が高く、授業にしっかり取り組むことができ、無解答が少なく最後まで努力しようとする等、実直な生徒集団であることが読み取れた。反面、集団に対して自分の意見を述べたり、話し合っただけで何かを決めるといった他者や集団に対するコミュニケーションに課題があることがわかった。

イ、学力向上のための取組

(1) 授業改善計画(結果分析から設けた各教科の課題解決に向けた取り組み)

<国語>

国語は課題の一つに「複数の条件を満たした作文を書くこと」がある。調査対象の学年は2年次に国語科で少人数授業を行い、各種作文・鑑賞文・ブックトークの原稿作成など「書くこと」を重点的に取り組んだ成果として、「書くこと」に対する抵抗が少ないので、現在課題作文や条件作文を取り入れ、課題の克服を図っている。

<数学>

昨年度及び今年度の課題から、以下の取組を行っている。

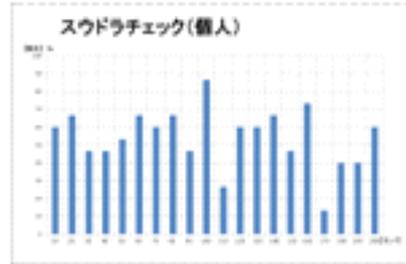
- ・基礎基本の定着のため授業で演習時間の確保をする。
- ・ノートでの内容確認やプリントやワークで演習を含めた家庭学習を促す。

鎌ヶ谷市立第三中学校

- ・内容確認や思考力、表現力を育む言語活動の充実を図る。
- ・授業の最後3分程度の時間で今日の学習の振り返りを自分の言葉でノートに書かせる。
- ・本時で気付いたことや学習したことをまとめるだけでなく、家庭学習での復習やテスト前にノートを見る自分自身が参考になるようなメッセージも書くようにさせる。
- ・三中数学科独自の数検「スウドラ」の取組を徹底させる。

「スウドラ」とは

・「スウドラ」とは、「数学ドラゴン」の略で、三中数学科オリジナルの自己検定である。分数・小数の計算から証明や三平方の定理の問題まで、単元・難易度ごとに各学年100段階、3年分で300段階に分かれているプリントに取り組むことで、生徒は各単元を自分がどれくらい理解してるかが分かり、自分の理解・技能が劣っている個所を確認するとともに、数学の自己学習と課題の克服を図ることができる。プリントは廊下に置いてあり、生徒は自発的にそれを取って課題に挑戦する。5枚（1単元）クリアするごとに賞状が出てランクアップするので、ゲーム感覚で意欲的に取り組んでいる。また、一人ひとりのデータも記録し生徒にそれを渡すので、生徒は自分の苦手や課題がある単元がはっきりピンポイントでわかり、実力テストや入試対策に役立っていると好評である。



(例：表の生徒は「自分は11番の復習計算と17番の角度を求める問題が課題である」とわかる)

・今年の2年生は、入学当初に実施した到達テストの数学の平均点が県平均マイナス8だったが、1年かけてスウドラに取り組んだ結果、2年4月のテストで県平均に、そして2学期末に実施した到達テストでは県平均よりも4～5点上回るまでになった。

<理科>

課題のある領域がはっきりしているので、復習プリント等を活用し補充を行っている。

(2) 3年間継続して行っている取組・改善された取組

<1年目の取組み(3年間継続)>*以下の太字は、中心的に取り組んだもの

- ①**学習目標を明示した授業** ②**相互参観授業** ③シラバスの作成と配布及び活用
- ④**家庭学習の推進** ⑤**全校漢字検定等各種検定受験の推進** ⑥**学習サポーターの活用**
- ⑦「ちばのやる気」学習ガイドの活用 ⑧**特別非常勤講師配置事業の活用**
- ⑨**質の高い授業を提供するための授業練磨** ⑩**学習実態調査による実態把握**

<2年目の取組(1年目の取組に加えて)>

- ①**全教員を四部会に分けての研修(全職員, みんなで取り組む学力向上)**

【家庭学習支援部会】	【学習スキル向上部会】
<p>目標：家庭学習の定着や質の向上を図る支援体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意欲を引き出す家庭学習指導のあり方 ・いかに「家庭学習をしたことでの成功体験」をさせるかの工夫検討 ・家庭学習内容の精選 ・提出した生徒への評価の仕方 ・宿題の与え方(量, 内容, 教科) 	<p>目標：ノートの取り方や話し合いの仕方, 学習課題の解決法など「学び力」の向上を図る支援体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ノート指導, ワークシートの工夫検討 ・単に板書を写すだけではなく, 工夫して考えを書き込めるノート作り ・定期テスト対策(計画表の工夫, 計画の立て方,

<ul style="list-style-type: none"> ・授業と宿題を結びつける指導を心掛ける ・優秀1デーンートの掲示 	<ul style="list-style-type: none"> ・目標の立て方、テスト勉強の意欲付け、テスト直しノート、テスト反省表など
<p>【少人数対応部会】</p>	<p>【授業規範改善部会】</p>
<p>目標：少人数やTTの利点を最大限に生かした個別支援のあり方の検討。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数学：単元によりTT、少人数、習熟度別授業のあり方をPDCAサイクルで検討 ・国語：少人数授業の利点を生かせる単元や教材の検討、および授業展開のあり方を検討する。評価規準の検討 	<p>目標：授業規範を確立し、整然とした学習環境の中で学習内容の定着を深める体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の約束10箇条の見直し ・各教室、廊下等、学校環境の定期的な点検 ・規範を乱す生徒への指導、支援の仕方検討 ・教師の指示等のマニュアル化 ・構成された板書計画、黒板の使い方

②個別支援体制作り（学習サポーターによる「放課後学習クラブ」）

③3学期実施、7時間授業で基礎学力の定着を図る。

○3学期に6日間、時程を変更して7時間目を作り、各学年で生徒に必要な支援を実施。取り組む課題としては、復習する機会がないために内容を忘れてしまっている内容や単元定着が十分でない計算、英単語や漢字等の反復練習、「千葉のやる気」学習ガイドの活用、12月に実施した到達テストの分析からわかる課題や弱点に基づく内容の克服など。

- ・1年生：「ステップアップデー」と名付け学年職員で数学と英語の基礎の復習を実施。
- ・2年生：「学力アップデー」と名付け、学年職員7人+T2教員、教務主任（数学科）+学習サポーターの10人で、習熟度別に8グループに分けた生徒達の支援を実施。グループは生徒が到達テストの結果をもとに自分の判断で選択。

（家庭学習の手引き）

<3年目の取組（1年目、2年目の取組に加えて）>

①四部会を三部会へ改偏

（A）授業改善部会：

- ・学習規範の徹底やノートの取り方、話し合いの仕方。
- ・グループでの話し合い活動など生徒の活動のある授業
- ・学習実態調査、授業アンケート等の実施・分析

（B）学習力向上部会：・家庭学習の取組と内容の充実、及びその評価について

- ・「家庭学習の手引き」作成
- ・定期テストを利用した学習計画の立て方とその実態

（C）小中連携部会：

- ・9年計画で児童・生徒を育てるという視点に立ち、9年間を見通した、授業や家庭学習の段階的指導を探るなどの取り組みを目指す。

②第三中学校家庭学習の手引き作成 ⇒⇒⇒

記載内容：家庭学習の意義、家庭学習のポイント、各学年の家庭学習の仕方、各教科（国、数、英、理、社）の家庭学習の仕方



（3）加配教員の活用（2年目：2年生国語科で少人数授業を実施）

- 2年生全クラスで1クラスを半分に分け少人数指導を行い、中学生生活ガイド、作文、感想文、鑑賞文、創作文、ブックトークやスピーチ原稿等の取組に力を入れ「伝える力」を育てた。
- 帯単元として毎時間授業の始めにスピーチを実施した。1クラスの人数が少なくすぐに順番が回ってくるので、みんなの前で自分の意見、考えを述べる機会を多く持てることが出来た。2

鎌ヶ谷市立第三中学校

巡目からはテーマや条件を決め、色々な視点から原稿を書く取り組みも行った。同時に話す指導も行い、1巡目は原稿を見ながらぼそぼそ話していた生徒が2巡目、3巡目と回を追うごとにみんなの目を見て堂々と抑揚にも気をつけて話せるようになった。

(4) ちばっ子「学力向上」総合プランの活用①「学習サポーターの活用」

- 本校はこの3年間学習サポーターが配置されている。1年目は1年生の数学のT3として授業の補佐や個別支援をしてもらったが、2年目からは、サポーターが出勤する週3日、「放課後学習クラブ」を開室し個別支援する体制を作った。放課後、学習クラブ室でサポーターは待機し、その日の授業でわからないことがあった生徒や一人では課題ができない生徒、また既習内容を復習したい生徒がクラブに行きサポーターに教えてもらう。テスト前になるとサポーター以外に各学年の教員もクラブに待機し、テスト勉強のサポートを行った。
- 毎回来室者と来室目的(誰が何の教科の何がわからなくて来室したのか)を生徒に記入させ、サポーターがそれを担任と教科担任に伝え、生徒の学習の悩みを共有した。さらに教科担任にはその生徒に対し授業の中で声かけや個別支援をしてもらった。

(5) ちばっ子「学力向上」総合プランの活用②「読書の推進、図書室の活用」

- 各教科で単元や教材によって図書室の利用を年間計画に位置付け、図書室を活用して授業や生徒への資料提示等を積極的に行った。年度始めに全学年図書室オリエンテーションも実施。
 - ・国語：宮澤賢治の並行読書。「ベンチ」「無言館の青春」等、戦争関連資料の展示と読み比べ、夏休み課題参考資料展示、ビブリオバトルや司書をT2としたブックトークの実施等、ポップの作成等。
 - ・社会：世界の国調べと新聞作成。統計グラフコンクール関連図書展示等。
 - ・美術：スタンドグラスの作成(作品集展示)
 - ・家庭科：冬休みの課題関連図書(年末年始の料理特集)展示。
 - ・総合：修学旅行、林間学校、校外学習の資料準備と各クラスへの貸し出し・図書館だよりを通じての様々な活用例の提供。

◎教師によるブックトークWeek(生徒に大人気でした。)とポップ作成。

ウ、取組の検証方法、時期について

①既習内容の定着度の確認・・・定期テスト、到達度テスト、全国学テ、鎌ヶ谷市学力調査

②生徒の意識調査、授業評価・・・6月、12月実施「学習実態調査」

年2回のこの調査結果が本校のPDCAサイクルの柱である。この調査結果をもとに、 「P」上記の計画(イ・(2)～(5))に沿って ⇒ 「D」取組を進め ⇒ 「C」この実態調査結果を分析し、教師一人ひとりの授業や学力向上の取組の効果の有無、生徒への家庭学習の啓発の効果などを見直し ⇒ 「A」再計画・実施を行っている。

3、取組の成果と課題

ア、平成25年度

(1) 成果 (H25・12月実施「学習実態調査」結果より)

25年度は、生徒の学力を向上させるためには、生徒に対する諸々の働きかけの前にまずは自分たちの日々の授業を見直し、質のよい授業を提供することが大事だと考え、オープン授業を柱に一年間研修を行ってきた。調査項目は生活習慣、学習習慣、学習スキル、学習意欲

鎌ヶ谷市立第三中学校

に関すること、各教科の評価、授業の理解度とその理由、学力向上について等、113項目に及ぶものである。この調査結果を元に、全教員が自分の授業の課題を確認し、その改善・向上に努めた。

「この8か月で自分の学力は向上したと思いますか」

学 年	①そう思う	③どちらかと 言えばそう思う	③どちらかと 言えば違う	④そう思わない	⑤わからない
1年生	35人(23.1%)	63人(41.7%)	23人(15.2%)	24人(15.8%)	6人(3.9%)
2年生	30人(21.4%)	53人(33.9%)	27人(17.3%)	24人(15.3%)	6人(3.8%)
3年生	38人(30.8%)	61人(49.5%)	13人(10.5%)	13人(10.5%)	2人(1.6%)
全学年	103人(24.6%)	177人(42.3%)	63人(15.0%)	61人(14.5%)	14人(3.3%)

①と②合わせて、全校の約7割近い生徒がこの半年で自分の学力は向上したと答えている。また、向上した理由の第1位として「授業に集中している」を挙げ、以下、「家庭学習が増えた」「授業がわかる」「塾に行き始めた」「補習テストや補習授業のお陰」「読書量が増えた」「携帯をやる時間が減った」「学習サポーターの活用」と続く。以上のことから、学習環境を整え、生徒に質の高いより良い授業を提供しようと授業改善に努めた結果、生徒は授業に集中して取り組み、「この半年で自分の学力は向上した」と評価している。25年度の研修の成果が表れたとみてよいのではないかと。

(2) 課題

1学年 自分の学力が向上しない理由 (複数回答)	
1位：家庭学習が少ない	： 26人(17.1%)
2位：授業がわからない	： 23人(15.1%)
3位：勉強をやる気が起きない	： 21人(13.8%)
4位：授業がつまらない	： 18人(11.8%)
5位：部活動で疲れる	： 17人(11.1%)
2学年 自分の学力が向上しない理由 (複数回答)	
1位：家庭学習が少ない	： 33人(21.0%)
2位：勉強をやる気が起きない	： 31人(19.7%)
3位：授業がつまらない	： 22人(14.0%)
4位：部活で疲れる	： 17人(10.8%)
5位：宿題や課題をやらない	： 15人(9.5%)
ゲームや携帯のやり過ぎ	： 15人(9.5%)

左記の「自分の学力が向上しない理由」を、わたしたちは重く受け止める必要がある。特に1年生では、「自分の学力が向上しないのは授業がわからないからだ」と考えている生徒が学年の15%、「授業がつまらない」と回答している生徒も12%いる。この点については、生徒からの授業評価をもう一度よくみて、自分の授業のどういう点がわかりづらいのか、どういう点が至らず、生徒が授業に飽きを感じるのか、反省をし、対策を練ることが大事である。

「自分の授業はこれでいい」「出来ないのは生徒の問題」「教科の特質」と考えるのではなくプロ意識を持ち「わかる授業」「質のよい授業」を提供するため、今後もみんなで研修を積んでいきたい。

2年生に関しては、「授業がわかる」は13%(4位)でやや残念ではあるが、向上したと考える理由からは、「家庭学習が増えた」や「塾に行き始めた」等、自分の学力を向上させるために努力している姿が読みとれる。と同時に「自分の学力が向上しない」理由も、「家庭学習が少ない」「やる気が起きない」等、個々の意識の問題が大きいことがわかる。2年生の場合は、意識の改革が何よりも必須だと思われる。学習の必要性や学力を向上させることが自分がよりよく生きるための後押しをしてくれるということを折に触れ語ることが必要である。「好きこそものの上手なれ」と言うが、学習意欲を大切に喚起させることが「学力向上」につながるのではないかと。学習スキルをアップさせるためにノートの取り方や効率的な家庭学習の仕方を教えることなども必要と思われ、このあたりが26年度の取組の柱となるだろう。

イ、平成26年度

(1) 成果 (H26 12月実施「学習実態調査」より)

〈この8ヶ月で自分の学力は向上したと思う生徒〉			
1年生：65.3%	2年生：60.6%	3年生：78.2%	全校：68.3%
〈この8ヶ月で自分の学力が向上したと思わない生徒〉			
1年生：34.7%	2年生：39.4%	3年生：21.8%	全校：31.7%
〈学力が向上した理由は何か〉			
1年生：①家庭学習が増えた	②学習方法の工夫	③授業がわかる	④塾に行き始めた
2年生：①塾に行っている	②家庭学習が増えた	③学習方法の工夫	④授業がわかる
3年生：①塾に行っている	②家庭学習が増えた	③学習方法の工夫	④携帯時間が減った
〈自分の学力をあと少し向上させるためには何が必要だと思うか〉			
1年生：①家庭学習を増やす	②わからないことを質問する	③ゲーム・携帯を減らす	
2年生：①家庭学習を増やす	②隙間時間使い方、学習方法の工夫	③ゲーム・携帯を減らす	
3年生：①家庭学習を増やす	②学習意欲を出す	③わからないことは聞く、学習方法の工夫	
〈自分の学力が向上しない理由は何か(複数回答)〉			
1年生：①部活で疲れる	②授業がわからない	③ゲーム、携帯のやり過ぎ	④意欲がない
2年生：①家庭学習が少ない	②授業がわからない	③部活で疲れる	④意欲がない
3年生：①家庭学習が少ない	②授業がわからない	③意欲がない	④ゲーム・携帯のやり過ぎ

「自分の学力が向上したと思う」と回答した生徒数を見ると、25年度よりも若干だが向上している。ただ25年度は「どちらかと言えばそう思う」という、曖昧な選択肢を入れての数値である。今年は生徒自身にしっかり自分の学習に対して向き合っただけのため、曖昧な選択肢を省き2択とした。それを踏まえた上で今年度のほうが「自分の学力が向上した」と回答した生徒が多いということは、今年度の取組の成果が表れたとみてよいのではないかと考えられる。

特に3年生は昨年度(2年次)に比べ「自分の学力が向上した」と思う生徒が大きく増加している。「進路選択をする」という自覚が、学力を向上させるための努力につながっているであろう。ここから、やはり学習の主体者である生徒自身の意識の向上が学力向上につながるのだということが言える。

どの学年も自分の学力が向上したと思う理由の上位に「家庭学習」「学習方法(学習スキル)」がある。また自分の学力を向上させるためには何が必要だと思うか」という質問に対しても、全学年が「家庭学習を増やす」を1位に挙げている。そこから、家庭学習支援の取り組みや学習スキルの向上によって、生徒は学力が向上したと実感していることがわかる。さらにその実感が「自分の学力をあと少し向上させる」ためにはもっと家庭学習に取り組むことが効果的である。という考えにつながっていると思われる。ここからも、今年度の取り組みの成果が読み取れるのではないかと考えられる。

家庭学習の取組については、1 day 1 page(以降1 day)の推進を全学年で行った。特に2年生は学習委員会の生徒達で「学年の学力を向上させるためにはどうしたらいいか」検討し、「学年生徒全員で毎日1 dayを出そう」と決め、取り組んだ。毎朝、学習委員がノートの提出を呼びかけ、内容を点検し、その日のクラスの提出率を廊下に掲示する。やってこない生徒には、学習委員が昼休みや放課後付き添って一緒に1 dayをした。そのためやってこない生徒も、「学習委員に迷惑はかけられないから。」と提出するようになり、4クラス中3クラスが早い段階

鎌ヶ谷市立第三中学校

で100%を達成できた。現在もそれは続いていて、家庭学習の習慣が定着し始めている。

(2年生 1day1pageノートの活用についての調査結果より)

1, 学年で1 day 1 pageを実施する理由は何だと考えますか。(多数意見 上位3位)

- ・家庭学習による学力向上(同趣旨内容含む)
- ・家庭学習の習慣をつけるため(同趣旨内容含む)
- ・ひとつのことをきちんと毎日継続する力を鍛えるため(同趣旨含む)

2, 自分の学力が向上するように、毎日努力をしていることはありますか。

学年合計	「はい」 (64%)	「いいえ」 (36%)
------	------------	-------------

3, どんな努力をしていますか。(多数意見 上位3位)

- ・1 dayを毎日やっている。予習復習をする。できるだけ机に向かい勉強する

4, 工夫している内容を答えて下さい。(多数意見)

- ・後で見直しやすいように工夫している。(色使い, 字の大きさ, 図をつける, 行揃え)
- ・できるだけ多く練習できるよう, 隅々までノートを活用している。
- ・重要な所に付箋をつけたり, 重要語句を朱で書いたりしている。
- ・間違えた問題を, わかるように工夫している。
- ・英単語の練習方法を工夫している。(4マスに分けて1マス目は単語, 2マス目は意味3マス目は練習, 4マス目は確認)
- ・わからないものを重点的にやったり, 教科書やノートの内容をもう一回書いている。

5, 1dayノートは学力の向上に役立っていますか。

学年合計	「はい」 (86%)	「いいえ」 (10%)
------	------------	-------------

6, 役立っていると思う理由を答えて下さい。(多数意見)

- ・1 dayのお陰で毎日勉強をするようになった。
- ・しっかり1 dayをやったらテストの成績が上がった。
- ・1dayがなかったらわからないところもそのまま。
- ・自分が頑張れるように考えて努力しようとしている。
- ・毎日自分から足りないところを考えて学習するようになったから。

始めは「家庭学習の習慣づけに」と考え、取り組んだ1 dayであったが、定着するに従って生徒自身がより学習効果の上がる1 dayの活用法を見出したり、家庭学習に臨む意識まで高まったことがアンケート結果から読み取れる。

(2) 課題

「そう思わない」と回答している生徒も増加している点から目を逸らしてはいけない。「そう思わない」生徒は全校413人中131人(31.7%)いて、昨年度の「どちらかといえど違ふ」と「そう思わない」生徒を足した数よりも多い(昨年度は125人で29.8%)学力が向上したと実感できない理由をしっかりと分析し、支援を行うことが大切である。

その中で、「自分の学力が向上しない」理由の2位に「授業がわからないからだ」が入っていることに対し、我々は猛省しなければならない。家庭学習の支援を中心に研修してきた26年度であったが、学年・学校を挙げて家庭学習の支援を行う一方で、25年度の取組の柱であった「授業力向上」に対する取り組みが不十分になってしまった事実を重く受け止め、一時間一時間の授業に真剣に取り組んでいきたい。

多くの生徒が家庭学習が定着し、自分の学力向上のための取り組みを行っている中で、その流れについてこられない生徒、取りこぼされている生徒にしっかりと目を向けて、個別支援する手立てを考えていくことが本校の緊急課題である。

ウ、平成27年度

(1) 成果 (H27 12月実施「学習実態調査」より)

〈この8ヶ月で自分の学力は向上したと思う生徒〉			
1年生：58.7%	2年生：61.8%	3年生：73.6%	全校：65.3%
〈この8ヶ月で自分の学力が向上したと思わない生徒〉			
1年生：41.2%	2年生：38.1%	3年生：26.3%	全校：34.7%
〈学力が向上した理由は何か〉			
1年生：①家庭学習が増えた ②授業がわかる ③塾に行きはじめた ④学習意欲の向上			
2年生：①家庭学習が増えた ②塾に行っている ③学習意欲の向上 ④授業がわかる			
3年生：①家庭学習の充実 ②塾に行っている ③学習意欲の向上 ④授業が分かる			
〈自分の学力が向上しない理由は何か(複数回答)〉			
1年生：①家庭学習が少ない ②ゲームのやりすぎ ③携帯のやりすぎ ④意欲がない			
2年生：①ゲームのやりすぎ ②意欲がない ③家庭学習が少ない ④携帯のやりすぎ			
3年生：①意欲がない ②家庭学習が少ない ③ゲームのやりすぎ ④携帯のやりすぎ			

3年間取り組んできた結果である。自分の学力が向上したと回答している生徒の割合は26年度よりは若干下がってしまったが、全校で65%以上の生徒が進級(入学)してからこの8カ月で自分の学力は向上したと回答しており、その理由の1番が全学年とも「家庭学習」と答えている。そして家庭学習が増えたのは、学習意欲が向上したからだということも調査結果から読み取れる。また、学力向上には教師の授業力向上が不可欠であることも読み取れる。

検証協力校として入学してから3年間継続して学力向上に取り組んできた3年生は、「自分の学力が向上したか」という質問に対し、平成25年度64.8%、26年度60.6%、そして27年度は73.6%が「向上した」と回答している。ここから、やると決めた取組を継続してしっかり行うことが大切だということも分かる。

(2) 課題

家庭学習の推進や学習意欲の喚起など、個への働きかけは継続して行ったが、はたして今年度の「話し合い活動を通して、学び合う学級風土を醸成し、学級集団を学習集団へと高めよう」というサブ主題が達成できたかということ、学級差・担任の力量や意識の違いが大きく、まだまだ達成には程遠い。個の取組から集団へと、そして生徒による自主的・自発的な学習集団ができるよう、次年度以降も手を抜くことなく取り組んでいきたいが、その際に課題として懸念されるのが協力校の指定が終わる次年度である。指定が終わる来年度以降もこの3年間以上に徹底して学力向上に取り組めるよう、全職員で研鑽していきたい。

エ、ちばっ子「学力向上」総合プランや加配教員の活用による成果

① 加配教員の活用(26年度2学年国語科 少人数授業に対するアンケート結果より)

1, 少人数授業をどう思いますか。			
①とてもよい	・・・81.9%	②けっこうよい	・・・18.1%
③あまりよくない	・・・0%	④少人数でない方がいい	・・・0%
2, 上記の理由を教えてください。			
1位・・・○人数が少ないので、集中して取り組める。			
○1クラスの人数が少ないので、挙手した時に指名される回数が多くてよい。			
2位・・・○全員でやるよりも授業内容が分かりやすくなった。			

- 少人数だから一人ひとりしっかり教えてくれるし、より真剣に出来る。
- 3位・・・○わかりやすく、事細かに教えてくれるから分かりやすくてよい。
- 4位・・・○人数が少ない分、雑談や授業の時でも個人の言葉をちゃんと拾ってくれる。
- 5位・・・○少人数の方がみんなの意見をしっかりと聞いて、勉強が分かりやすい。

- 上記のアンケート結果でもわかるとおり、少人数授業は生徒に大変好評であった。
- 生徒の創作活動、表現学習で、一人ひとりに十分時間を取って添削や助言ができ、結果として生徒の「書くこと」に対する抵抗感がある程度払拭し、創作する楽しみを味わわせることが出来たと思う。昨年までは、「感想文や作文を書く」と言ったら、生徒からブーイングが起きたり、「何を書けばいいかわからない」と、期限までに仕上がらない生徒が目立ったりしていたが、26年度は授業の中で日常的に「書く」ことを取り入れているので、いい意味で書き慣れてきたようである。また、新しい単元に入る時には、シラバスを用いてその単元や教材の授業の流れを確認しているので、生徒も「この学習の最後には感想文（鑑賞文、作文）を書くのだな。」とわかり、何を書こうか考えながら見通しを持って授業に臨んでいるので比較的すんなり書き始められるようになった。

② ちばっ子「学力向上」総合プラン（学習サポーターの活用より）

- 「放課後学習クラブ」開設1年目の平成26年度は、6月から2月までの利用生徒数が延べ490人となり、生徒が思い立った時に気軽に学習できる場となっている。特にテスト前は大盛況で教室に入れたい生徒もいたほどである。2年目の今年は6月から2学期末で、すでに延べ685人となっている。
- 利用した多くの生徒から「テスト対策で来室したとき、よく教えてもらえるので助かる」「家では勉強が出来ないからここがあるので助かる」との声が多く聞こえた。中には、「部活動を辞めたが、ここがあるので放課後の時間を有効に使える」と言う生徒もいた。

まとめとして

以上、3年間の取組、成果と課題を記してきたが、一番大きな成果は学力向上に対する教職員の意識の向上である。1年目は「授業力向上」ということで、教師個々の取り組みだったため、研究主任一人で職員に働きかけていた感があり、悩みも多かった。

しかし2年目、3年目は全職員をいくつかの部会に分け、全員が各学年代表として必ずどこかの部会に所属したため、全ての教職員が「学力向上」に対し主体的に取り組んでくれた。学期ごとに各部会からその学期の取り組みと成果・課題・次学期への取組計画などが提出されるので、各部会の進捗状況もわかりとても助かった。

各部会以外でも、各学年主任が全面的に研修をサポートしてくれ、1dayの取り組みや補習授業、学年ごとに工夫を凝らしたテスト計画表や家庭学習を充実させる取り組み等、学年単位でも積極的にしてくれた。また、職員室で「最近○○さんはよく家庭学習してるよね。」「○○くん、数学のこの問題あまり理解出来ていないよね、次回ほほえみ先生に入ってもらおうか」と情報交換したり、「○組、最近1day提出率下がっているよ！」等々の会話が日常的に飛び交うようになり、常に教職員が「生徒の学力を上げるためにできることは何か」を意識して取り組んでいる姿が本当にありがたく、全職員で研修に取り組むその姿、教職員の変容が、本校にとって何よりの成果である。

1. 授業者である教師は、

- ①教えるプロとしてしっかり教材研究をし、一時間一時間の授業に真剣に臨むこと。
- ②毎時間の学習目標を明確にし、その目標を達成できるまであらゆる手だてを考えて

生徒にアプローチすること。(本時の目標と本時の評価の明示)

- ③実態調査の結果を真摯に受け止め、常に授業改善や個に応じた指導を怠らないこと。
- ④実態調査の結果を分析し自校の課題を明確にし、その解決に向けて研鑽を積むこと。

2, 生徒に対しては,

- ①キャリア教育も含め、「なぜ学ぶのか」、学習する目的を持たせ、意欲を喚起させること。
- ②ノートの取り方や授業の受け方、試験勉強等、生徒の学習スキルの向上を目指すこと。
- ③個々のレベルに応じた課題を心がけ、家庭学習の定着と充実を支援すること。

※この3年間の検証事業をとおして、本校が辿り着いた「学力向上に向けた取組」

- ・生徒一人ひとりの学習に対する意識の改革と家庭学習の時間と質の向上を図る。
- ・教員一人ひとりが『よい授業を目指そうとする意識や授業力の向上』を図る。
- ・生徒のために「当たり前のことを当たり前にやる」ことに徹底して取り組んでいく。

この3点を全職員で徹底して行うことである。

平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題

すべての生徒が主体的に取り組む授業づくり
～「学び合い」の推進と「学力向上」の取り組み～

2 研究の概要

(1) 全国学力・学習調査の結果における特徴と分析

①平成25～27年度教科に関する調査の全国平均値との比較

3教科とも全国平均と比べ正答率は低く、その傾向は国語よりは数学、数学よりも理科において顕著である。これは、質問紙の回答と有意な相関関係が見られ、その教科が「好き」「大切」「分かる」と感じている教科の方が正答率が高い。また、国語、数学ともA問題よりもB問題の正答率が低い。3年間の経年変化で見ると、わずかな伸びではあるが、国語A、国語B、数学Bにおいて伸びが見られる。特に、数学の伸びは大きいものであり、国語・数学の二教科ともB活用において成果が得られたことは、今日的課題を意識して本事業に取り組んできた成果と考える。

領域別に見ると、国語においては「話す・聞く」「読む」に比べて、「書く」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が苦手である傾向が続いているが、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」についてはやや改善が見られる。

数学においては「資料の活用」が他の領域に比べ低い状態が続いている。「関数」が改善されている一方「図形」の正答率は下がってきている。

理科においては、「地学的領域」が全国平均に近い正答率であるのに対し、「物理的領域」と「化学的領域」が、全国を大きく下回っている。

問題形式別に見ると、3教科とも「短答式」「選択式」に比べ「記述式」が大きく全国を下回り、課題が大きい。国語、数学においては、3年間でその傾向が強くなってきている。

②平成27年度質問紙調査の肯定的な回答の全国平均値との比較

(全国平均値を100として)

	国語	数学	理科
教科の勉強は好きですか	105.6	96.2	79.7
教科の授業は大切だと思いますか	100.7	99.8	79.8
教科の授業の内容はよく分かりますか	103.0	93.2	87.3

家で、学校の宿題をしていますか	77.3
自分には、よいところがあると思いますか	80.3
家で、学校の授業の予習をしていますか	85.4
家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか	88.9
友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか	89.4
家で、学校の授業の復習をしていますか	92.0

八街市立八街中学校

1, 2年生のときに受けた授業で扱うノートには, 学習の目標(めあて・ねらい)とまとめを書いていたと思いますか	1 1 3 . 1
読書は好きですか	1 1 2 . 0
1, 2年生のときに受けた授業では, 生徒の間に話し合う活動をよく行っていたと思いますか	1 1 1 . 1
1, 2年生のときに受けた授業のはじめに, 目標(めあて・ねらい)が示されていたと思いますか	1 1 0 . 2
1, 2年生のときに受けた授業の最後に, 学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか	1 0 8 . 0

普段(月～金曜日), 1日当たりどれくらいの時間, 携帯電話やスマートフォンで通話やメール, インターネットをしますか(携帯電話やスマートフォンを使ってゲームをする時間は除く)	「4時間以上」 の回答 1 1 4 . 0
普段(月～金曜日), 1日当たりどれくらいの時間, テレビゲーム(コンピュータゲーム, 携帯式のゲーム, 携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む)をしますか	「4時間以上」 の回答 1 1 2 . 3
学校の授業時間以外に, 普段(月～金曜日), 1日当たりどれくらいの時間, 勉強をしますか(学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む)	「3時間以上」 の回答 9 2 . 1

家庭学習の時間が全国と比較して少なく, 宿題・予習・復習とも, 習慣になっていない生徒が多い。一方, 携帯電話・スマートフォン・インターネット・ゲーム等に費やす時間は, 全国と比較して多くなっている。このことから, 家庭での過ごし方・時間の使い方について, 課題があることがわかる。

一方, 授業での目標・ねらいの提示, 話し合い活動の充実, まとめ・振り返り時間の確保等が, 全国を上回るポイントを得ることができた。「学び合い」を推進してきた成果が感じられる。

③千葉県標準学力検査の推移

「学び合い」についての詳細は以下に示すが, 「学び合い」の学習形態を手立てのひとつとして取り入れたことが, 本校にとって有効であった。本検証事業の中心となった「学び合い」導入以前の平成23年度から平成26年度までの千葉県標準学力検査の推移を見ると, 依然として県平均を下回っているものの, その差は少なくなっている。特に英語科においてその伸びが表れ, 3年間で各学年10ポイント程度伸びている。

また, 「学び合い」を手立てのひとつにしたことは, 生徒の学習に向ける意識の変容にも有効だった。

④校内「学び合いアンケート」の結果(単位: %)

質問項目	27年度	25年度
あなたは, 授業・学習に積極的に取り組んでいる。	90	90
あなたは, 自分の力で考えている。	91	91
クラスは互いに, 訊き合うことができる。	96	93
クラスは互いに, 教え合うことができる。	93	92

クラスに、私語(おしゃべり)をする人はいない。	36	39
クラスに、居眠りをする人はいない。	50	40
あなたは、授業が楽しい。	68	70
あなたは、授業内容や学習内容がよくわかる。	82	80
あなたは、家庭学習によく取り組んでいる。	74	54
学び合いは、学級の仲間づくりに役立っている。	85	85
クラスは、学び合う集団になっている。	87	84

「授業への積極性・自主性」「話し合い・教え合い」などは、肯定的な回答が90%以上の高いポイントを得ている。また、「学び合う集団の実現」も高いポイントである。「居眠りの減少」「家庭学習の増加」が2年間の伸びとして顕著である。私語に関しては、課題が残る。

(2) 学力向上に成果のあった取組

千葉県標準学力検査ではある程度、また、全国学力・学習状況調査ではわずかではあるが、国語A、国語B、数学Bにおいても伸びが見られた。以下に、3年間の取組をまとめる。

①「学び合い」の推進

- ・生徒同士の関わりを多く取り入れた授業で、生徒の孤立化を防ぎ、全員参加の授業の実現を目指した。
- ・4人グループ、コの字隊形などの学習形態による授業を積極的に取り入れ、生徒がコミュニケーション(言語活動・共同作業)を通して学びを深め、練り上げていく工夫をした。



- ・視覚的な教具や操作的な活動など、積極的にモノを取り入れた授業を展開することで、生徒の意欲を高め、思考を深められるようにした。
- ・学習課題の提示(青枠)とまとめ(赤枠)を全授業で共通実践した。また、生徒の学びを深めるために、より探求的な学習課題の設定を心掛けた。
- ・朝の会から帰りの会まで、常時コの字隊形による学校生活を送ることで、生活を通して、話を聞くことや互いに関わり合うことなど「学び合い」の素地を育ててきた。
- ・全校集会や学級活動において、「学び合い」の活動をを行ったり、委員会活動を活用したりすることで、生徒が主体的に「学び合い」を深めていく環境作りをした。

②研修の充実

- ・校内で、教科を超えた授業研修会を年3回実施した。
- ・学区の小学校と連携を図り、合同研修会を年5回(授業研修3回、理論研修2回)実施した。
- ・校内で日常的に相互授業参観を行ったり、勤務時間外に自主研修会を実施したりすることで、教師の同僚性を高めた。
- ・全職員が、先進校の視察を行い、「学び合い」の実践を促進した。

③家庭学習の指導

- ・毎日、学級担任に家庭学習を提出する取組を全校体制で実践した。
(生徒の学習委員会が、呼びかけと点検活動、キャンペーン等を行い推進した。)
- ・各教科において、家庭学習の方法を指導し、奨励した。
- ・学年体制で家庭学習用のプリントを作成し、積極的な活用を促した。

④数学科、英語科における少人数授業の実施

- ・数学科では、2、3年で少人数授業を実施した。
- ・英語科では、1年で少人数授業を実施した。

⑤放課後・長期休暇を利用した補習の実施

- ・数学科、英語科において、小テスト等の結果をもとに補習を実施した。
- ・長期休暇には、各学年で補習を実施した。

⑥朝読書の推進

- ・毎日、朝10分の朝読書に時間を設け、原則としてカットせずに実施した。
- ・教師も生徒とともに本を読み、本に親しむ環境を整えた。

⑦加配教員の活用

- ・学習指導部担当として、校内の授業巡回を行い、授業の実態を把握して授業改善の方向を示したり、学習指導部だよりの発行を行い、教員の授業改善の啓蒙をした。
- ・小中連携担当者として、学区の小学校と連携して授業改善を行ったり、共同の研修会を企画運営した。

⑧「ちばのやる気」学習ガイドの活用

- ・小テスト、家庭学習用プリントとして活用した。

⑨全国学力・学習状況調査の結果分析から計画した授業例

課題の見られた問題の概要と結果

数学B 6(2) 正答率 15.0% (全国平均 30.8%)

(概要) 底面になる円の半径の長さが 8 cm のとき、表や式から、側面になるおうぎ形の中心角の大きさを求める方法を説明する。

学習課題 円錐の側面のおうぎ形の中心角と、底面の半径の関係を調べよう

半径が 12 cm のおうぎ形を側面とする円錐を作る。中心角がいろいろな大きさのおうぎ形を作り、それらを側面とする円錐の底面の円の半径がどのようになるか調べてみよう。その結果を、中心角の大きさを x° 、底面になる円の半径の長さ y cm とし、 x と y の関係を表と式で表してみよう。

4人グループによる活動

○4人グループで、 90° 、 120° 、 150° 、 180° のおうぎ形を用いて、底面の円の半径を計測する。

表	中心角の大きさ x ($^\circ$)	90	120	150	180	式	$y = \frac{x}{30}$
	半径の長さ y (cm)	3	4	5	6		

表と式から、 x と y の関係は、次のいずれであると判断できるか。また、その理由は何か。 ア. 比例である イ. 反比例である ウ. 比例でも反比例でもない

コの字隊形で、全体で検討

○コの字隊形で、周辺の生徒と意見交換をしてから、全体で検討する。
 ア 表から・・・ x が 2 倍になると、 y も 2 倍になっているから。
 式から・・・ $y = a x$ の形になっているから。

底面になる円の半径が 8 cm の円錐を作るためには、側面となるおうぎ形の中心角の大きさを何度にすればよいかを求めたい。中心角を求める方法を、表または式を使って説明しよう。

4人グループによる活動

○4人グループで意見交換をし、説明をホワイトボードに書き、発表する。

2倍					
x	...	120	...	240	...
y	...	4	...	8	...

$y = \frac{x}{30}$ の式に、 $y = 8$ を代入する。

$$8 = \frac{x}{30}$$

2倍

この方程式を解いて、 $x = 240$

○中心角 240° のおうぎ形で円錐を作り、底面が半径 8 cm の円になることを確認する。

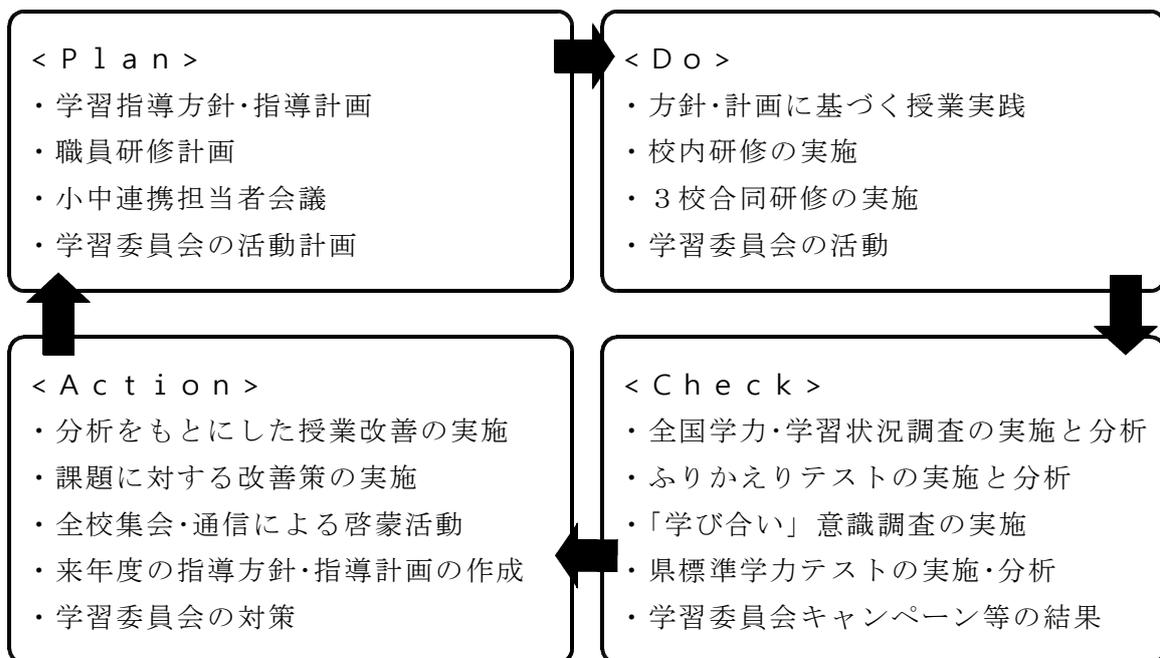
⑩記述式問題への対応する取組

- ・定期テスト(全教科全学年)において、記述式問題を必ず出題することとし、事前の授業で、それに対応する学習を展開した。

⑪携帯電話の使用時間短縮のための取組 (9 STOP 10 OFF)

- ・2学年の総合の授業において携帯電話を扱った際に、調査の結果の概要を知らせ、「9時には家族以外との通信をやめ、10時には電源を切る」ことを呼びかけ、取り組みを始めた。

(3) 検証改善サイクル (PDCAサイクル)



3 成果と課題

(1) 成果

- ・生徒同士が関わり合いながら、全員参加で学ぶ「学び合い」を導入することで、積極的・主体的に学ぶ生徒を育てることができた。このことは、特に生徒の学習意欲を増進させることとなり、その結果、学力向上につなげることができた。
- ・朝の会から帰りの会までコの字隊形での生活を行うことで、「学び合い」を浸透させ、落ち着いた生活を送ることができた。直接的な数値として表れてはいないが、学力向上の一因となったと考えられる。
- ・学習課題(青枠)とまとめ(赤枠)の共通実践を行うことで、授業内での課題提示

八街市立八街中学校

や、振り返りの時間の確保につなげることができた。このことは、ねらいを明確とした授業づくりにつながり、結果、生徒が「教科の授業の内容がよくわかる」と感じられるようになったと考えられる。

- ・教師と生徒会の双方から家庭学習の推進の取組を行うことで、家庭学習に取り組む生徒を増やすことができた。
- ・全校集会や委員会活動を活用することで、生徒の中に、「ともに学ぶクラスを作ろう」という意識を育てることができた。
- ・教科を超えた授業研修会を行うことで、全職員が共通意識で学習指導にあたることができ、「学び合い」の定着に役立った。また、全職員が先進校に視察に行くことで、具体的なイメージを持って教材研究・授業にあたることができた。
- ・学区の2校の小学校と共同で、年5回の研修を続けることで、共通意識で学習指導にあたることができた。このことが中1ギャップの解消に役立ち、1年生のスムーズな学習へとつなげることができた。
- ・毎朝の10分の朝読書をカットせずに継続的に実施することで、読書による習慣を身につけることができ、読書好きの生徒を育てることができている。このことが、国語A、国語Bにおける成果の一因であろう。

(2) 課題

- ・「学び合い」の学力的な成果が、全国学力・学習状況調査では、明確な数値として認められない。また「学び合い」の評価が、意識調査のみで、学力との因果関係が明確にされていないため、今後の具体的な方策を十分たてることができずにいる。この点について分析をすすめ、より明確なPDCAサイクルを確立していきたい。
- ・検証改善サイクルを十分活用することができなかつたと感じている。様々な実践をしっかりと分析し、より具体的な対策を講じていきたい。
- ・成果にあげたように、家庭学習に取り組む生徒を増やすことができた。今後は家庭学習をより自主的・計画的なものへと、内容を検討し、質も量も増やしていくことで、学力の向上につなげることができるだろう。
- ・加配教員の活用については、十分とは言えなかつた。加配教員の活用について、また、学習指導部をチームとして組織していくことでよりよい取組ができるであろう。続けて検討していきたい。

平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題

「自ら学び、自ら考え、自ら表現できる生徒の育成」

～ 自主学習の確立を目指し、一人一人の学習意欲を高める指導の工夫 ～

2 主題設定の理由

本校の生徒は学習習慣の確立が不十分で、基礎的・基本的な知識・技能をなかなか習得できない生徒が多い。また宿題には取り組むが、自分で計画を立てて自主的に学習に取り組むことが苦手であり、家庭学習や自主学習の習慣化が大きな課題である。そのため、学力の重要な要素といわれている「学習意欲」の向上に今年度も引き続き焦点を絞り、研究を推進してきた。生徒たちに学ぶ喜び、分かる喜びを実感させることで、自ら学ぼうとする意欲を持たせたい。さらに生徒の知的欲求を充足させ、現状から一段階上を目指し、常に高い目標を持って主体的に学習に取り組めるよう、本主題を設定した。

3 研究の概要

(1) 全国学力・学習状況調査結果における特徴と分析

- ・平成26年度に比べ平成27年度は、国語A・B、数学A・Bともに教科の平均正答率が大幅に向上した。4つの項目の合計点数は、前年比で+32.0である。
- ・国語はA(知識)・B(活用)とも全国平均を上回っている。数学においても、平成25年度からの3年間で、A・Bとも確実に向上がみられ、全国平均に近くなっている。
- ・本校において平成25・26年度の過去2年間、国語、数学ともB(活用)がA(知識)を大きく下回っていたが、平成27年度は国語、数学とも、B(活用)の伸びがA(知識)を上回っている。
- ・国語においては、ほとんどの学習指導要領の領域、評価の観点において、全国平均を上回っている。唯一、「書くこと」の領域に難がみられる。
- ・数学の出題内容においては、「資料の活用」の領域をのぞき、全国平均を下回っているが、過去2年間と比べると、どの区分にも向上が見られる。その中で、問題形式の「記述式」にまだ課題がみられる。
- ・理科においては、理科A(知識)が全国平均に近く、理科B(活用)が下回っている。学習指導要領の分野では、「生物的領域」が全国平均を上回っている他は、大きな差はみられない。問題形式は、数学と同じように「記述式」にまだ課題がみられる。
- ・質問紙の調査結果にみられる特徴と分析結果から、「授業への関心・意欲」について、国語と理科は全国平均に比べても、高い結果が出ている。数学に関しても、前年度よりも向上がみられる。また、「読書が好きな生徒」が全国平均を大きく上回り、「学校が楽しい」と感じている生徒や「規範意識」の高さも、全国平均を大きく上回っている。その反面、「家庭で宿題をする」、「予習をしていく」等の項目が、全国平均に比べるとまだまだ低い。また、問題形式の「記述式」につながるものとして、「自分の考えを説明したり表現する」項目に課題がみられる。

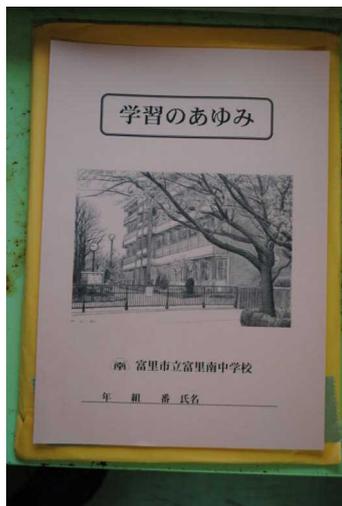
(2) 結果分析を受けての対策と実践内容

本校は学力向上に向けての対策と実践内容について、平成25年度から27年度までの3年間で、最初の1年目を第1期として、「学習意欲の向上に焦点を絞った取組」を行い、2年目から3年目を第2期として、「学力向上と不登校対策に向けた、分かる、魅力ある授業づくり」を行った。その具体的な取組を下の表に表す。

期	具体的な取組	内 容 説 明
第1期	①学習支援のための窓口機能の強化	・教科担任は「授業における学び方」を、学級担任は学習のあゆみ<資料1>を通して、「家庭での学び方」について具体的に助言・支援を行った。また、全校体制で行っている定期テスト前に希望補講・指名補講という2種類の補講を行い、各教科とも学習のつまずきを減らそうと努力した。
	②教え合い・学び合いによる協働学習	・学級活動や日々の短学活において、教え合い・学び合いの時間を設定した。各教科の授業においても、2～4人1組のグループ学習を取り入れることで、意欲的に参加する姿勢がみられた。教わる側の立場で、つまずきのポイントを明確にするとともに、教える側に立つことで、より一層生徒相互の理解が深まった。
	③学習に対する自発的な取組	・学習委員会の活動として、定期テストごとに予想問題づくりと、「家庭学習コンテスト」<資料2>を行った。定期テストの回数を重ねるごとに、全校生徒の学習時間の平均時間が増えていった。特に3年生では、教室内や廊下に「激勉シート」<資料3>や「学習コーナー」を設け、学習意欲の向上につなげることができた。
	④授業力向上に向けた取組	・学期ごとに「相互授業参観」を設定し、ベテラン教員から若手教員への授業の伝承を図ることにより、全校での指導法の工夫改善を図り、教員一人一人の授業力の向上に取り組んだ。
第2期	①小中連携による学習規律の確立	・学区3小1中の小中連携で、共通の「学習のルール」<資料4>を定め、普通教室、特別教室、廊下等に掲示し、学級会や学習委員会の取組で、その到達度や問題点を話し合った。また、小中連携の生徒指導連携部を中心として、「生活のきまり」<資料5>を定め、生徒指導の機能を生かした授業の展開に努めた。
	②分かる授業に向けた指導方法の工夫	・第1期に引き続き相互授業参観を行い、それを反省・改善用紙にまとめ、各教科会で授業改善等に役立てることができた。技能教科を含む全ての授業で、毎回、「本時のめあて」<資料6>を青枠で「本時のまとめ」を赤枠で明記して、「学習課題の明確化」を行った。また、授業の終わりや帰りの会で「振り返りの場」を確保し、達成感や反省の場とした。更に、思考力・表現力・学力向上を達成するために、1時間の授業の中にグループ活動、調べ学習、話し合い活動等を取り入れ、「学び合いの場」を設定した。
	③学習窓口機能	・第1期に引き続き、定期テスト前の3日間の補講を行った。今年

<p>能の強化による個別指導</p>	<p>度は1日目を5教科の希望補講、2日目を英語の希望補講、3日目を数学の希望補講とした。原則として、学年体制で行っているが、補講教科の担当がいけないときは、他学年や学年に所属していない職員が応援する等、全校体制で取り組んでいる。また、夏休みには3～5日間の補講を行い、学習のつまずきを減らし、基礎学力の定着を図ることができた。</p>
<p>④家庭学習の習慣化</p>	<p>・学習委員による家庭学習コンテストを引き続き行い、その結果を廊下や階段に掲示した他、見本となる学習ノートを掲示したり、学級通信で紹介したりした。また、各学級での家庭学習の取組と成果をまとめ、それについて話し合うことで、反省や改善につなげることができた。</p> <p>保護者に向けては、学校HPに「学校から発信する家庭教育支援プログラム」の支援資料を載せ、啓発している。</p>

〈資料1〉学習のあゆみ 〈資料2〉家庭学習コンテスト 〈資料3〉激勉シート



〈資料4〉学習のルール



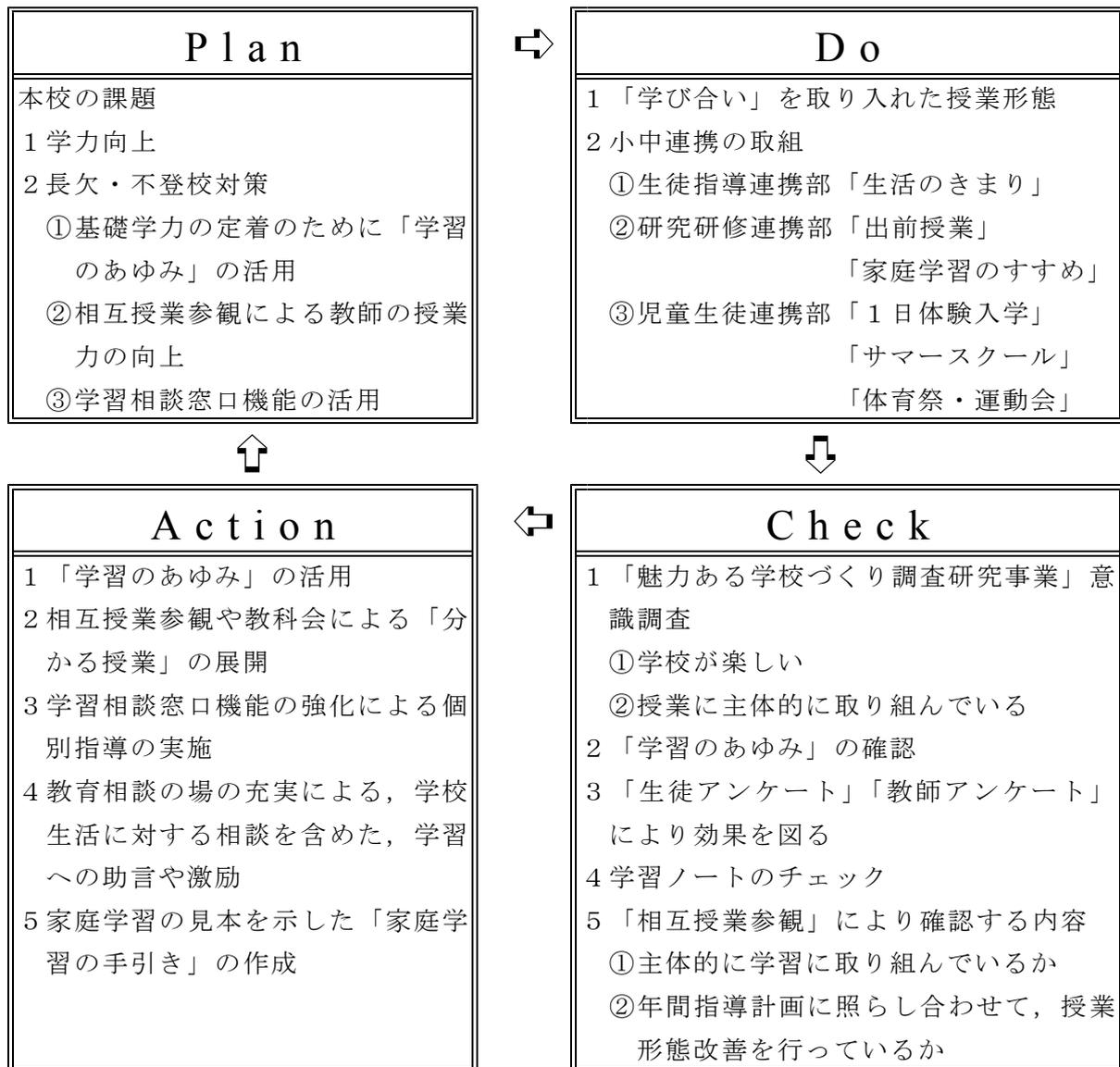
〈資料5〉生活のきまり



〈資料6〉本時のめあて



(3) 検証改善サイクル (P D C Aサイクル)



4 成果と課題

(1) 成果

①加配教員の活用

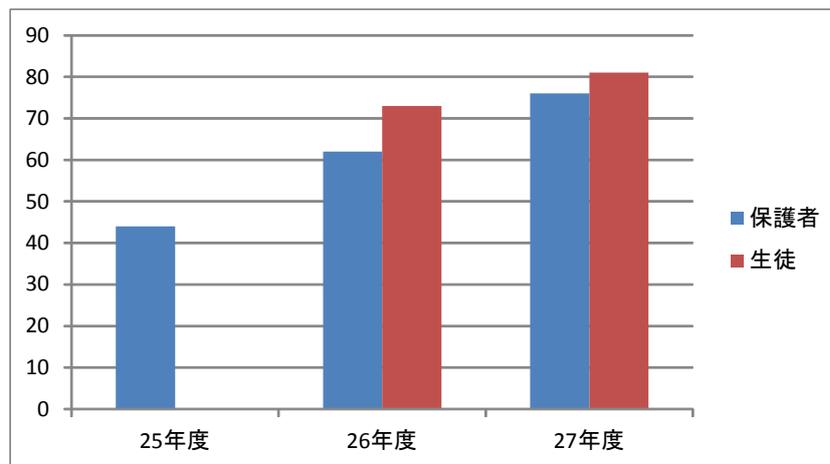
保護者の学校評価アンケートや、生徒の学習アンケートによると、基礎・基本を重視した、個別の学習支援を一番望んでいることが分かる。そのため本校では、加配教員による少人数指導の特性を生かし、個に応じた学習支援を目指し、1学年で数学と英語のT.Tを、3学年で数学の少人数指導を、1・2年生の2クラスで日常的に支援を行い、基礎学力の定着や下位層の学力の底上げに役立てることができた。

②小中連携の「学び合い」授業展開

小学校と同じように、授業の最初と最後に「本時のねらい」と「本時のまとめ」を明記し、学習課題を明確化したり、各教科ごとに「学び合い」の授業を年間計画に載せたりした。その授業形態を学校全体の研修として行い、5月の北総教育事務所指導室訪問で全職員が学習指導案作成、10月には「魅力ある学校づくり調査研究授業公開研究会」で授業展開を含む学校公開を行い、「分かる授業」の実施に努めた。

また、保護者・生徒からのアンケート<資料7>からも、「分かりやすい授業を行っている」と回答した割合が、保護者・生徒ともに大きく伸びている。また、全国学力・学習状況調査からも「授業のねらいや目標を明記している」の項目が全国平均を大きく上回り、結果につながっていると思われる。

(資料7)「分かりやすい授業を行っているか」(保護者・生徒アンケートより)



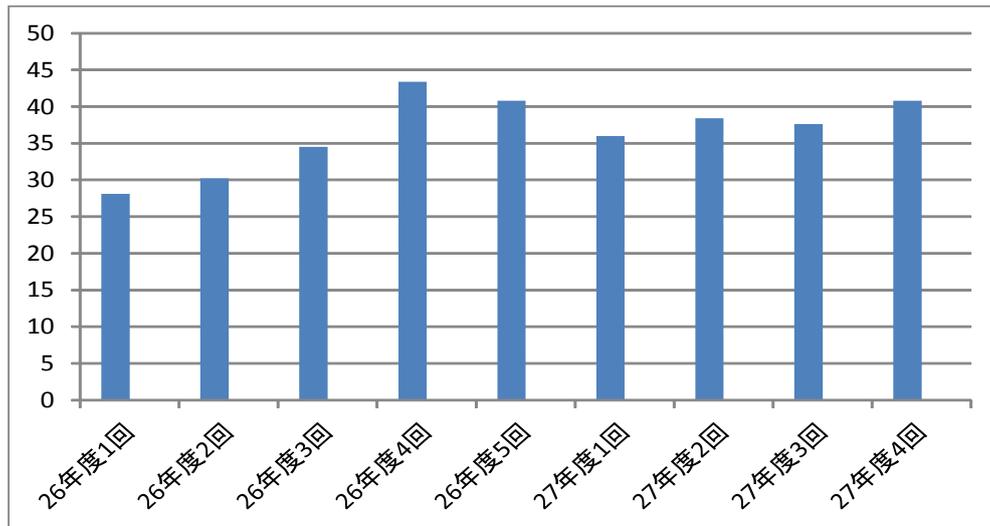
③ちばっ子「学力向上」総合プランの活用

全国学力・学習状況調査から分かるように、本校は国語、数学、理科ともA(知識)に比べて、B(活用)の方にまだ課題がみられる。その改善としてちばっ子「学力向上」総合プランの「教師力アップ」チャレンジプランにおいて、②で示した、生徒にとって「分かる授業」を目標に「学び合い」を各授業に取り入れることを、学校全体の研修として取り組んだ。また、「ちばのやる気」学習ガイドを、授業での練習問題や家庭学習、定期テストの参考問題等に活用して、思考力・資料活用能力等の向上に努めている。

④家庭学習の充実

本校の課題の1つである家庭学習の充実も、学習委員会の取組や各担任の努力により、<資料8>から分かるように、定期テスト前の家庭学習時間が確実に伸びている。今後、「家庭学習の手引き」を今後作成し、量より質、生徒が自主的に取り組み、学力向上につながる家庭学習につなげていきたい。

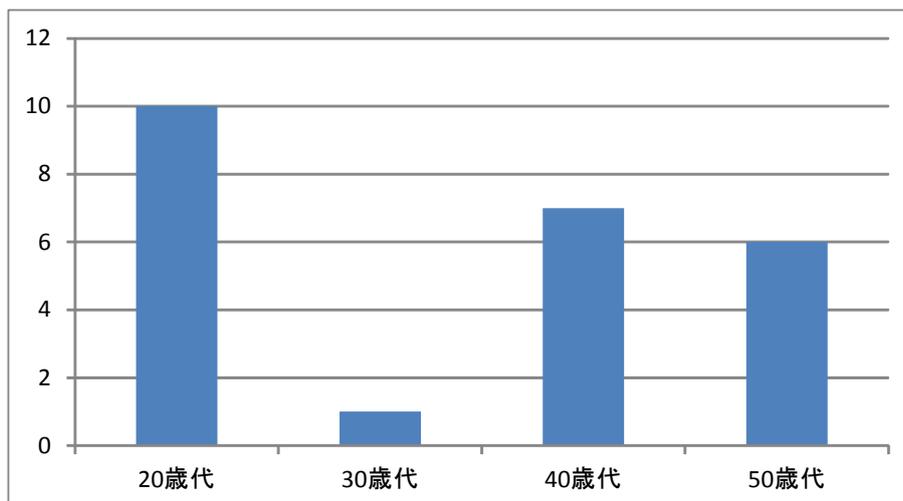
〈資料8〉 定期テスト前家庭学習時間の推移



(2) 課題

全国学力・学習状況調査から、本校は「国語や数学、理科の授業を行うのが楽しい」「悩みを教師に相談することが多い」等の生徒が多い反面、「学習の成果につながらない」「自分で計画を立てて自主的に学習に取り組む」ことが苦手な生徒が多いことが分かる。そのことから、教育相談の場をさらに充実させて、学習の方法や計画の立て方等のアドバイスをを行い、学力向上につなげていく。また、〈資料9〉から分かるように、本校は初任者を含む若手教員が多く、今年度は20歳代の教員が10人と、全職員の40%を超えている。そのため、本校のこれからの課題として、「若手教員の育成」が挙げられる。加配教員による若手教員育成推進や、相互授業参観でベテラン教員からの指導、教科会での研修を随時行い、若手教員の育成、授業力アップを目指していく。

〈資料9〉 富里南中学校年齢別教員数



平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題

客観的データに基づいた、学力向上を目指した教育実践の開発及び指導方法の工夫
～生徒の学力向上に向けたPDCAサイクルの確立を目指して～

2 研究の概要

(1) 全国学力・学習状況調査の結果における特徴と分析

平成27年度3年生の国語A・B、理科については全国平均値を超えている。数学に関しては、数学Aは全国平均と同水準、数学Bはやや全国平均を下回る状況である。しかし、平均正答数に関しては全国平均値とほぼ同数であることを考えると、数学に関しても全国平均正答率と差は無く、全国平均とほぼ同水準であるといえる。また、本校生徒の特徴として解答の未記入が少ないことが挙げられる。難易度の高い問題でもあきらめずに考え解答を記入する生徒が多いということでもある。生徒質問紙で各教科の関心が高いことから、生徒の実態にあった指導が日々の授業で行われている成果であると言える。平成26、27年度と2年連続の傾向である。今後も続くように努力していかなければならない。

問題形式に関しては、記述問題に課題があることが確認できた。平成26年度は、全国平均を上回っていることを考えると残念な結果である。昨年度の3年生が1年時から続けた作文指導が有意であったことから、作文指導を全校体制で実施する必要があるといえるデータである。

数学の「関数」領域が全国平均値を大きく上回り、「資料の活用」領域が全国平均値を下回っている。「資料の活用」については、記述問題が多いことが影響している。様々な情報を解釈し文章で表現する指導を今後も積極的に行っていかなければならない。

② 調査結果にみられる特徴と現状分析

平成27年度の本校3年生は、各教科への関心が高いこと、学習習慣や基本的な生活習慣が身につけていることが生徒質問紙のデータから確認することができた。我々教職員が日々の学校生活を送る中での観察から得られる主観からも納得のいくデータであった。また、作文への苦手意識が平成26年度同様に全国平均値よりも少ないことが確認できた。日々の作文指導の中で苦手意識を解消することができていることは確認できたが、各教科記述問題の正答数の向上に結びついていないことが明らかとなった。平成26年度3年生は記述問題が全国平均値を上回っていたことを考えれば、平成26年度3年生が1年時から実践していた作文指導を取り組むべきであることは明らかである。

職員研修等で生徒の実態把握を重視してきたこともあり、生徒一人一人の実態を多面的に把握した後に、授業を行うことができるようになったことで、生徒の学習への意欲が高まっている。地域人材・施設の活用に関しては、全国平均値を下回っている。学力向上を目指す実践や学校行事など多くの実践を実施しなければならぬ中で、地域人材・施設の活用にまで手が回らない状況であるためであると考えられる。日々の実践の評価を行い、実践を精選していくことで、地域人材等が活用できる時間を確保していかなければならない。

個に応じた指導については、平成27年度から数学に関しては全ての授業を習熟度別少人数で実施している。また、国語、理科、英語についてもT・Tで授業を行っている。少人数加配が2名、学習サポーターが1名配置されていることからできている実践である。全国の中学校よりも恵まれた環境にあると言える。

(2) 学力向上のための成果のあった取組

① 数学の授業を習熟度別少人数

平成26年度については、3年生は4/4時間、1年生は3/4時間を習熟度別少人数で授業を行っている。平成27年度は全授業を習熟度別少人数で実施。

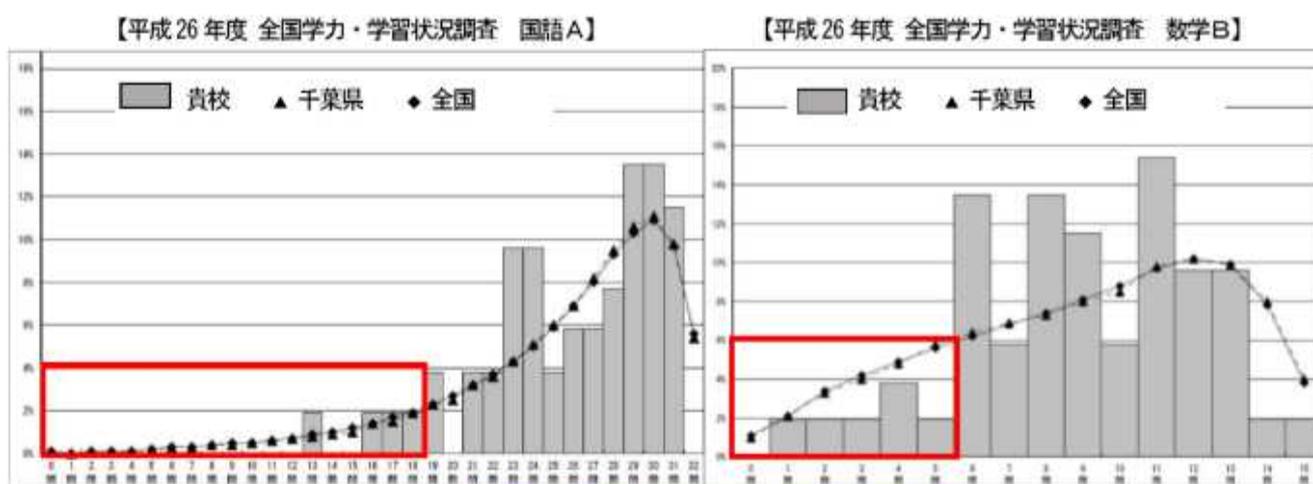
② 学習サポーターの活用

平成26年度については、以下のような支援を行った。

- ・ 1, 3年生の数学基礎コースの授業に参加し学習支援を行った。
- ・ 2年生の数学の授業についても学習支援を行った。
- ・ 3年生の家庭学習用のプリントを作成し提出されたプリントのチェックを行った。

③ 国語, 英語の授業をT・T (ティーム・ティーチング) で実施

平成26年度については、国語が1・2年生2/4時間、3年生2/3時間をT・T (ティーム・ティーチング) で行った。英語が全学年T・T (ティーム・ティーチング) で行った。※英語はALTも含む。



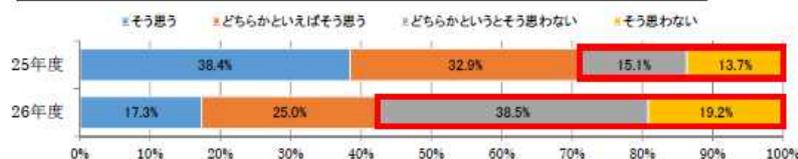
正答数の少ない生徒が減少した

本校はサンプル数が少ないため(N=52)、未記入の生徒が少数でも平均正答率に大きく影響してしまう。よって、生徒の習熟度に応じた指導が必要であると考え、上記のような実践を行ったところ、平成26年度全国学力・学習状況調査の国語A・数学Bの正答数度数分布表から、正答数の少ない生徒の割合が全国よりも低くなっている。個に応じた指導の成果であると言える。国語B, 数学Aの度数分布表も同様な傾向であった。

④読んで書く実践

【平成25・26年度 全国学力・学習状況調査生徒質問紙から】

質問：400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くことは難しいと思いますか



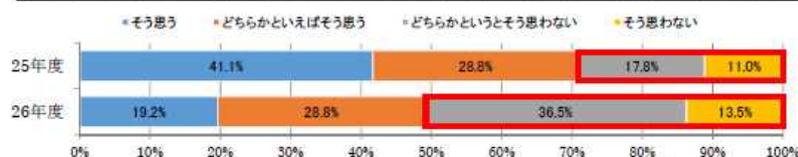
「感想文や説明文を書くことが難しいと思わない生徒の割合」

【平成25年度】 28.8% (全国31.8%)

【平成26年度】 57.7% (全国33%)

28.8ポイント向上

質問：学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文に書いたりすることは難しいと思いますか



「説明したり、文章に書いたりすることが難しいと思わない生徒の割合」

【平成25年度】 28.8% (全国31.5%)

【平成26年度】 50.0% (全国32.7%)

21.2ポイント向上

芝山中学校は全国平均値よりも20%以上、作文を書くことを難しいと思わない生徒が多いことが確認できた。3年間の作文指導の大きな成果である。授業で積極的に発言する生徒が増えてきていることからみても、納得のいくデータといえる。平成27年度についても左記と同様なデータが得られている。

⑤新聞記事意味調べの実践から

河北新報平成27年9月8日(火) 10時55分配信

宮城県石巻市大川地区出身の佐藤そのみさん(19)は東京の大学に通う。古里を舞台にした映画を撮ることを目指して今春、親元を離れた。

6月14日、東京都内であった復興支援コンサートに招かれた。1人で壇上に立ち、東日本大震災で児童と教職員84人が犠牲になった母校、大川小にまつわる話をした。

「当時6年生の妹が学校で津波に巻き込まれ、犠牲となりました。これからの命を守っていくためにも校舎を残したい」妹みずほさん＝当時(12)＝は通訳を志していた。妹のこと、母校の思い出。佐藤さんの話に約200人の聴衆からむせび泣きが漏れた。

〈公の場で発言〉

佐藤さんが震災と向き合えるようになるには、3年近い時間を要した。その頃、校舎が壊されるかもしれないという話を耳にした。「校舎には卒業生や亡くなった子どもたちの夢が詰まっている。死を無駄にはいけない」。そう心に誓った。

卒業生の男女6人で昨年3月、「チーム大川」を結成、校舎を震災遺構として保存するため、公の場で発言してきた。

ことし3月、住民団体「大川地区復興協議会」の説明会。校舎の解体を求める大人の訴えを初めて直接聞いた。「つらくてたまらない。校舎をなくし、静かに手を合わせて子どもたちと語り合える場にしたい」佐藤さんは胸が苦しくなった。「誰一人、間違ったことはない」。長い時間をかけて話し合っていく必要のある難しい問題だ、と感じている。

〈「耳を傾けて」〉

チーム大川の一員で石巻市の高校1年只野哲也君は今年1日、16歳になった。

震災時は5年生。校庭にいて避難する途中、津波に襲われ、奇跡的に助かった。3年生の妹末捺さん＝当時(9)＝と母しろえさん＝同(41)＝、祖父弘さん＝同(67)＝を失った。

それでも「自分たちと同じ思いをする人を今後出してはいけない」と、見聞きした事実や教訓をありのままに語ってきた。

父英昭さん(44)は当初、九死に一生を得た息子をメディアに出しているのかわからないかどうかわかった。ただ、一生懸命取材に応じる姿に「これでいいのではないか」と思った。被災当時を反すうし、次第に強くなっていることが実感できたからだ。

「大切な人を亡くした現実をつらく、逃げ切れるものではない。大事なものは現実と向き合い、喜怒哀楽を表現すること。話を聞いてほしいという子どものサインに気づき、耳を傾けてほしい」

上記のネット配信の新聞記事を読んで意味調べの実践を行った。わからない言葉にラインマーカーで線をひいて辞書で意味を調べるといった流れで学習を進めた。意味調べが終わった後に記事の要約や自分の考えを書くといった実践である。以下に数学を苦手としている生徒6名の意味調べをした言葉を記載する。

女子生徒Aが辞書で調べた言葉

- ・古里
 - ・親元
 - ・犠牲
 - ・むせび泣き
 - ・要した
 - ・公の場
 - ・九死
 - ・喜怒哀楽
 - ・まつわる
 - ・志していた
 - ・聴衆
 - ・漏れた
 - ・震災遺構
 - ・訴え
 - ・反すうし
- 【15】

女子生徒Bが辞書で調べた言葉

- ・今春
 - ・聴衆
 - ・訴え
 - ・一生懸命
 - ・志していた
 - ・むせび泣き
 - ・九死
 - ・反すうし
- 【8】

女子生徒Cが辞書で調べた言葉

- ・復興
 - ・壇上
 - ・聴衆
 - ・震災遺構
 - ・喜怒哀楽
 - ・支援
 - ・犠牲
 - ・むせび泣き
 - ・訴え
- 【9】

男子生徒Dが辞書で調べた言葉

・九死に一生	・反すう
・公の場	・聴衆
・震災遺構	・一生懸命

【6】

男子生徒Eが辞書で調べた言葉

・復興	・衰える
・母校	・遺構
・解体	・訴える
・一生懸命	・喜怒哀楽

【8】

女子生徒Fが辞書で調べた言葉

・今春	・要した
・九死に一生	・教訓
・反すう	・遺構
・聴衆	・喜怒哀楽

【8】

〔考察〕

数学基礎コースの生徒データを分析した。数学を苦手としているというよりも学習面全般が苦手な生徒が多い。授業での学習態度はいたってまじめな様子の生徒達である。6人中4人が「訴え」を辞書で調べていた。しかし、4人とも「裁判所に訴える」の語意を選択している。当該生徒は、文面から正しい語意を選択できていないことがわかる。また、6人中5人が「聴衆」を辞書で調べている。一般的には、漢字から意味を読み取ることができる単語である。しかし、当該生徒は漢字2文字で語意をとらえようとしている。1文字ずつ意味を考えることができなければ語意は理解できるはずである。当該生徒が理解できていないことから、漢字の学習段階から語意を理解させることが重要である。生徒がわからない言葉は最大でも8個と考え枠を準備していたが、15個調べなければ文章を理解できない生徒が存在した。このような事例をみても生徒の語彙力を高める必要があることがわかる。

平成26年度末に卒業した生徒の手紙の一部分を抜粋

〇〇先生へ

3年間お世話になりました。3年間、私たちの学年主任として、行事の内容を考えたり、いろいろなことをまとめてくださって、とても感謝しています。1年生から続けてきた作文も、大変だと思っていましたが、今では良かったと思っています。

この手紙を書いた生徒は、高校受験の時に作文を書き続けてよかったと実感したそうである。入試等でも記述問題が増えていることを考えれば、作文指導に力を入れるべきであることは明らかである。

生徒の言語力の基盤は語彙力であると考え、話し合い活動などの前に、文章を読んで書く活動を取り入れることにした。また、生徒が書いた文章については学級担任だけでなく、国語担当や学年主任も添削を行った。これらの実践が本校生徒の記述問題正答率の向上に影響したといえる。また、生徒の作文への苦手意識がなくなっていることも平成26年度学力・学習状況調査生徒質問紙の結果からも確認できた。文章を書く機会を多く設定したことで成果が得られたと言える。今後も継続し実施していきたい。

注) 本校の平成27年度3年生は、2年時に数学の授業を習熟度別少人数で実施していないので、前年度との比較ができないために平成26年度3年生のデータを用いている。平成26年度3年生については、前述した実践をすべて行っている。

(3) 検証改善サイクル (PDCAサイクル)

①平成27年度研究計画から

月	形 態	研 修 内 容
4月	全体研修 (職員会議, 学年会) 教科・領域研修	全体研究計画・研究主題・研究組織 研究主題・研究計画の作成 (PLAN), 評価について
5月	全体研修 (生徒指導共通理解) 教科・領域研修 (大会議室)	生徒の実態把握 (RESEARCH) ①白書から②保健室から③生徒指導から 指導案検討 (実態調査の作成) (PLAN)
6月	教科・領域研修 (大会議室) 指導主事訪問	指導案検討 (展開部分の検討) (PLAN) 研究授業 (DO)

7月	教科・領域研修（大会議室）	1学期の反省（CHECK） 評価の確認 2学期の取り組みについて
8月	全体研修（大会議室） 教科・領域研修	全国学力・学習状況調査の報告（CHECK） ①本校生徒の実態を確認する ②本校生徒の改善点を明確にする ③11月の授業公開に向けての準備
9月	教科・領域研修（指導案検討） 研究報告書作成	授業公開に向けた準備・授業相互参観 指導案検討（ACT）（PLAN）
10月	教科（指導案作成） 研究報告書作成（冊子完成）	指導案検討（ACT）（PLAN） 研究発表（プレゼンスライド作成）
11月	全体研修 学力向上交流会	掲示物作成・研究発表リハーサル 研究授業（DO）
12月	教科・領域研修	2学期の反省（CHECK） 評価の確認 2学期の取り組みについて
1月	学年研修	ハイパーQ-U（CHECK） ①データ検証②今後の指導上の留意点確認
2月	全体研修，教科・領域研修	年間指導計画の確認・検討・作成 （ACT）（PLAN）
3月	全体研修 教科・領域研修	1年間の反省（ACT）（PLAN） ①評価の確認②年間指導計画完成

P Plan（計画）：従来の実績や将来の予測などをもとにして教育計画を作成する

D Do（実施・実行）：計画に沿って教育活動を行う

C Check（点検・評価）：教育活動の実施が計画に沿っているかどうかを確認する

A Act（処置・改善）：実施が計画に沿っていない部分を調べて処置をする

②RESEARCH（調査）から得られた本校生徒の実態

【量的調査】

＜記述問題で未記入の生徒が少なくないこと＞

- ・未記入生徒の共通点は、作文がまったく書けていなかった。
- ・未記入生徒は、問題文を読まない傾向が見られた。
- ・未記入生徒は、言語理解に課題があり、ものごとを上手く説明できずにいた。

＜習熟度の差が大きいこと＞

- ・一斉指導で対応することが難しい。

【質的調査】

- ・問題文を読んでも意味がわからないので読まない。
- ・読書をしていても眠くなってしまう。
- ・家庭学習で何をすればよいのかわからない。

「学力の基盤は語彙力である」という研究仮説がRESEARCHの中で派生した。

③芝山中学校 PDCA サイクルの事例

RESEARCH

芝山町中学生白書の作成
全国学力・学習状況調査
2者面談

記述問題の未解答率が高い
語彙力に課題のある生徒の存在

PLAN（計画）※学年の実践

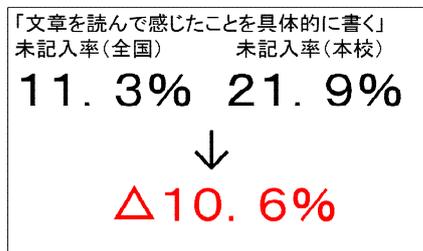
新聞記事の意味調べ教材
新聞記事の要約教材
作文の雛形の作成

書く力を育成するための教材
語彙力を高める教材

DO（計画）

各教科授業，道徳
特別活動，総合
朝読書

通常の実践を工夫する
まずは学年の実践
わかりやすい発問



CHECK（点検・評価）

全国学力学習状況調査
千葉県標準学力テスト
ハイパーQ-U

ACT（処置・改善）

有意であった実践の整理
教材の共有化
新たな教材作成

記述問題の正答率向上
未解答率の減少

有意な実践は全校で実施
学力向上交流会で有意な実践を紹介

3 成果と課題

(1) 成果

- ・学力の基盤は語彙力であることが確認できた。
- ・読んで書く活動（作文指導）が言語理解を深め文章力を高めることが確認できた。
- ・数学の習熟度別少人数指導が有効であることが確認できた。
- ・基礎・基本の定着をはかる学習が表現力の基盤となることが確認できた。
- ・教師側が授業で使う言葉を生徒がわかりやすくなるように厳選するようになった。
- ・下位層生徒の学力が向上した。
- ・文集さんむへの入賞者が増えた。

語彙力に課題のある生徒が各教科の正答率が低くなる傾向が確認できたことから、語彙力を高める実践と、個に応じた指導に重点を置いた結果、全国学力・学習状況調査の各教科の平均正答率を向上させることができた。量的データから生徒の問題点を明らかにして、2者面談等で質的データを収集したことで、改善へ向けた具体的な手立てを実践することができた。多面的な生徒理解を意識したからこそ得られた成果であった。

(2) 課題

- ・上位層の生徒が全国と比較すると少ない傾向が改善できていない。
- ・一斉指導の中で個に応じた指導の工夫が必要である。

(3) 今後学校全体での取組

- ・語彙力を高める取り組みを継続する。
- ・自分の考えを文章にまとめる取り組みを全学年で実施する。
- ・個に応じた指導を継続する。 ※習熟度別少人数，ティームティーチング
- ・生徒理解のための量的・質的データの収集を継続する。
- ・有意な実践を継続するために開発した教材を全校で共有する。
- ・授業のねらいと目標を生徒に提示する。
- ・授業力アップを目指した研修を計画的に実施する。

平成27年度「学力・学習状況」検証事業研究成果報告書

1 研究主題

『生きる力』を求めて

～ 学力・学習状況の向上に関する検証改善を通して ～

2 研究の概要

ア、全国学力・学習状況調査の結果における特徴と分析

国語A・B、数学A・B、の全ての領域において県・全国平均を大きく下回っており、全体的な学力向上が望まれる。学習習慣が身につけていない生徒が多く、基礎学力の定着が不十分である。

①国語

「漢字を書く」「語句の意味」「人の話を聞いたり、文章を読んだりして自分の考えを書く」等の設問に対する正答率が低いことがわかる。これらの能力は生活に直結しているものであり、しっかりと身につける必要があるものである。言葉への関心を深め、語彙を増やすために言語活動を活発に取り入れ、「書く」「聞く」「話す」能力を向上させる必要がある。外国籍の生徒をはじめ、本校の生徒は日常会話に問題は無いが、教科書の意味がわからない、読めないという問題もある。

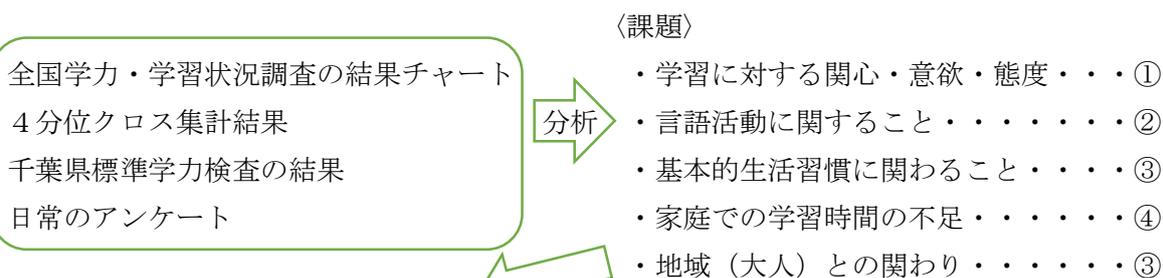
②数学

「指数を含む正負の計算」「一元一次方程式」「二元一次方程式」「図形」「与えられた資料を活用する」等の設問に対する正答率が低いことがわかる。基礎基本を確実にすると共に、問題を読み取り、何を答えるべきか判断する力を養う必要がある。

イ、学力向上に成果のあった取組

1, データ分析 —データ分析対策チーム発足—

平成25年度から学力・学習状況調査結果を分析するチームを組織しデータの分析を行った。



<平成25年度に行った取組>

①学習に対する関心・意欲・態度の向上に向けて

- ・授業規律の確立 → 自治活動（生徒会・学習委員会）
- ・授業の目標を明確にする → 意欲の向上
- ・チャレンジタイム（朝自習）の取組の徹底 → 学習への関心、基礎基本の定着

②言語活動の充実に向けて

- ・様々な場面で自分の意見を発表する状況をつくる

- ・グループワーク、アクティブ・ラーニング
- ・「ちばのやる気」学習ガイドの活用
- ・評価テストの結果のデータ化
- ・図書室の有効利用

③基本的な生活習慣を身につけるために

- ・生徒会、専門委員会活動の充実 → 自治活動、達成感
- ・クラス反省 → 生活習慣の振り返り

④家庭学習定着に向けて

- ・テスト前家庭学習時間調査
- ・1ページ学習

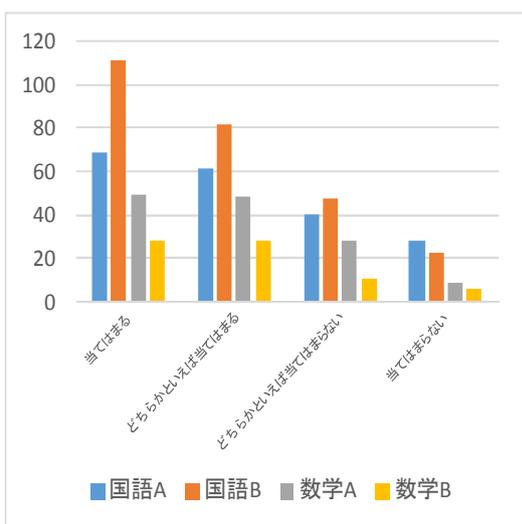
<成果>

- ・学習委員が中心となった「授業の約束3箇条」を徹底する取組により、落ち着いて授業を受ける雰囲気を作られ、授業規律が確立されてきた。
- ・クラス反省により、自分たちの生活を評価、反省し、新たな目標を立て実行することで学校生活が安定し、生活習慣の向上が図れた。
- ・朝のチャレンジタイム（朝自習）を充実させることで、学習へ取り組む意欲が向上した。

2、平成25年度の取組から ー平成26年度への課題ー

学力・学習状況調査生徒質問紙平均正答率によるクロス分析し、結果が顕著な質問から学力向上に生かす取組を行う。(グラフの単位 名)

質問番号4 ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある。



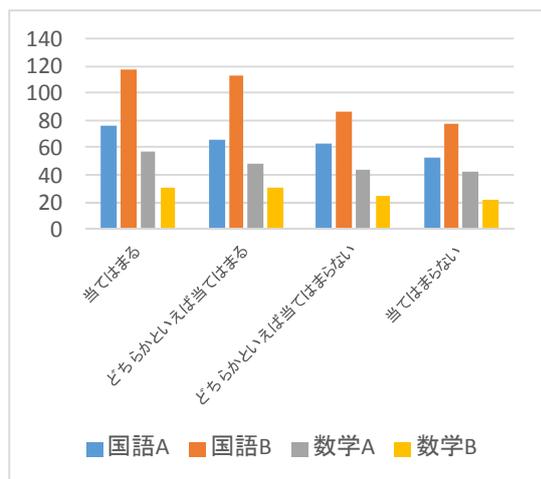
【傾向】・ものごとを最後までやり遂げることで喜びを感じたことのある生徒の正答率は非常に高い。

- ・学校行事や部活動での達成感を感じることが大切なのではないかな。

【取組】

- ・学校行事や部活動だけでなく、普段の生活の中の小さなことにも目標を持ち、しっかり取り組むことが必要である。(清掃・授業課題・委員会活動など)
- ・何かを達成した時の喜びを分かち合えるクラスの雰囲気作りを行う。

質問番号 7 友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ。



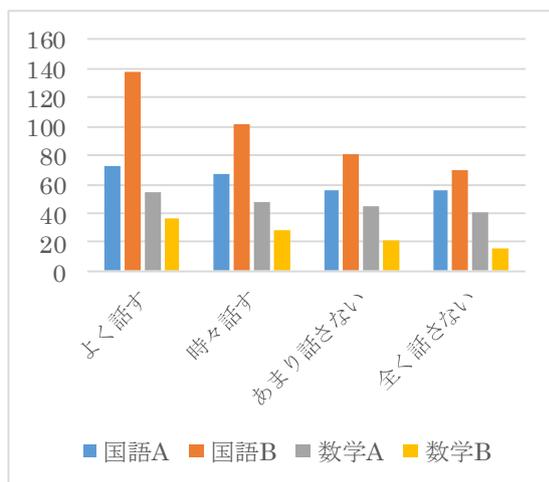
【傾向】・人前で話すことを得意とする生徒は苦手とする生徒より正答率が高い。

・自分の考えや意見を発表することで授業にも積極的に取り組み、理解が深まるのではないだろうか。

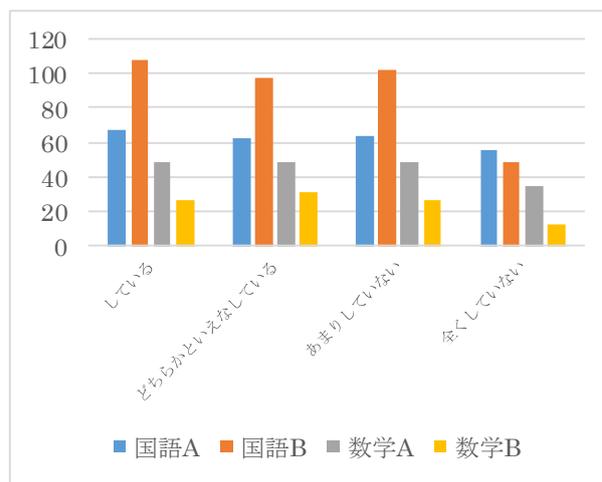
【取組】

- ・まずは人前で話すことへの苦手意識を克服する必要がある。
- ・多くの授業で発表やスピーチの機会を増す。
- ・どんな意見も間違いではない。どんな意見も受け入れるという雰囲気作りを行う。

質問番号 17 家の人（兄弟姉妹含まず）と将来について話することができる



質問番号 31 学校での出来事について話す



【傾向】・自分の将来について考えている生徒は正答率が高い。

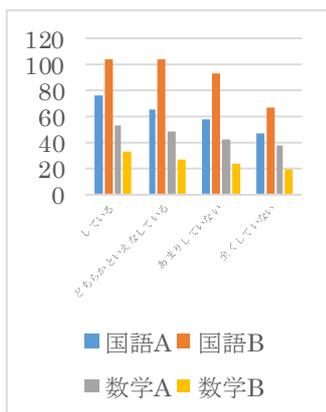
・進路、学校生活についての会話が家庭内である生徒は正答率が高い。

【取組】

- ・キャリア教育を1年次から積極的、計画的に行い、家庭で話す機会をつくる。
- ・学校便りや学年便り等がしっかり家庭に届くようにし、家庭での話題を提供する。

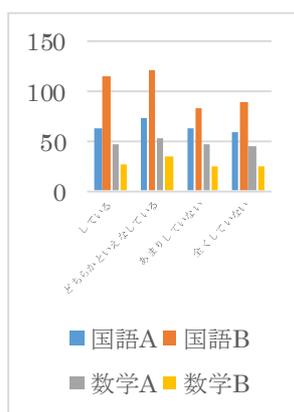
質問番号 35

学校の宿題をしている



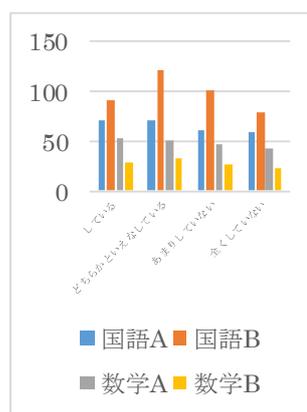
質問番号 36

授業の予習をしている



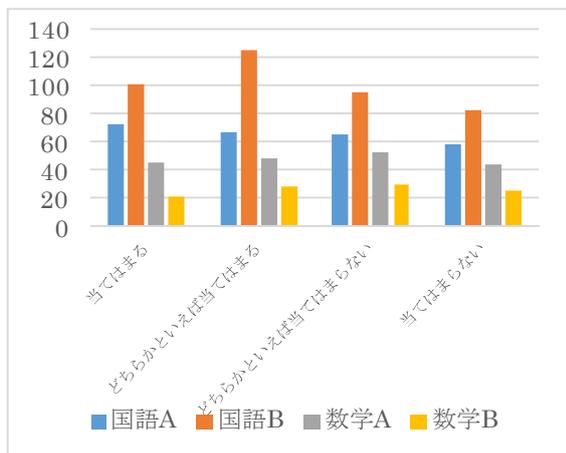
質問番号 37

授業の復習をしている



- 【傾向】
- ・学校の宿題をしていると答えた生徒の正答率が高い。
 - ・予習、復習もどちらかと言えばしている生徒の方が正答率が高い。
- 【取組】
- ・家庭学習の習慣が必要である。
 - ・長期休業だけでなく、日常的に課題を出し、家庭学習の習慣づけを行う。

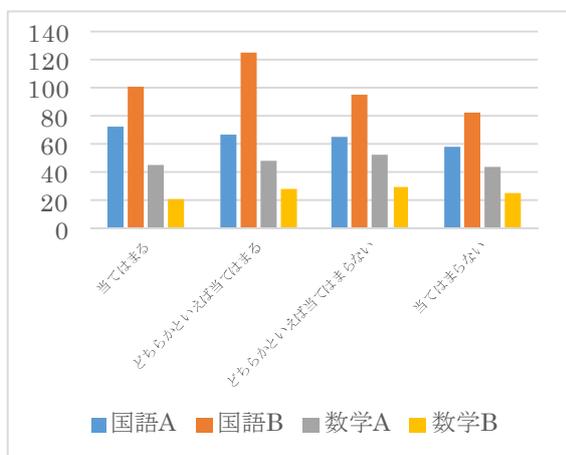
質問番号 4 2 今住んでいる地域の行事に参加している。



- 【傾向】
- ・どちらかと言えば参加している生徒の正答率が高い。
 - ・大人とのかかわりが大切なのではないか。
- 【取組】
- ・夢プランやバザーなど、地域が参加する行事に積極的に参加する。
 - ・学校行事に地域の方に参加してもらえるように積極的に呼びかける。

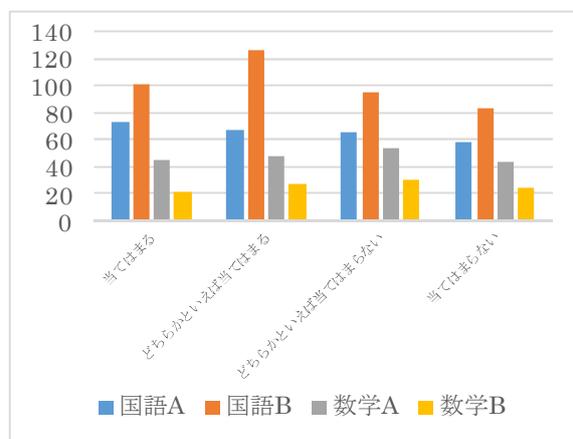
質問番号 6 6

読書は好きだ



質問番号 6 8

国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている。



- 【傾向】
- ・読書が好きと答えた生徒の正答率が高い。
- 【取組】
- ・図書室の有効利用。委員会による読書の呼びかけ。
 - ・読書の苦手意識をなくすことで「読む」ことへの抵抗感をなくす。

3、平成26年度の取組

①教科部会の充実、教師力・授業力UP～表現活動を取り入れた授業を～

- ・目標を明確にし、達成感を持たせる工夫と発表の場を設ける。(相互授業参観)
- ・毎日の予習、復習など家庭学習が習慣化する取組。

全職員で行う！

②キャリア教育・進路指導の充実

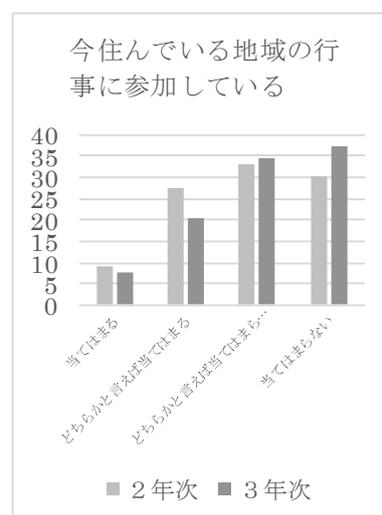
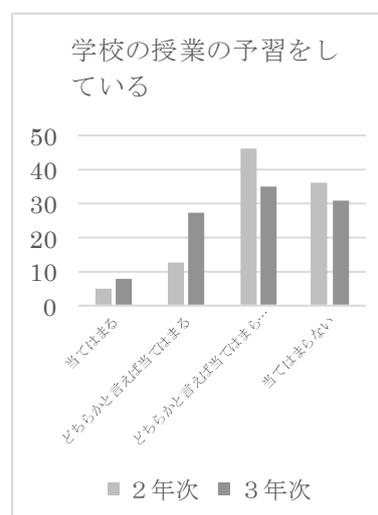
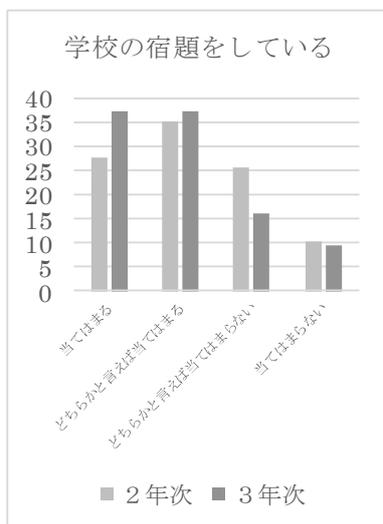
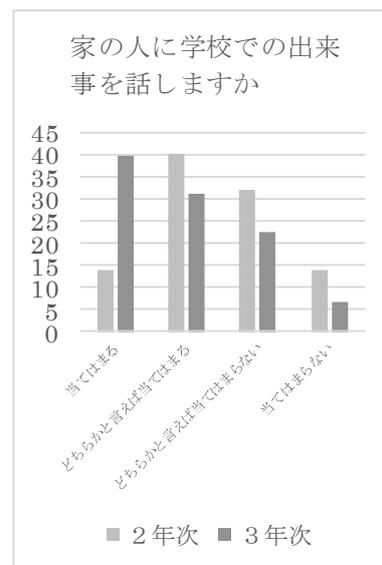
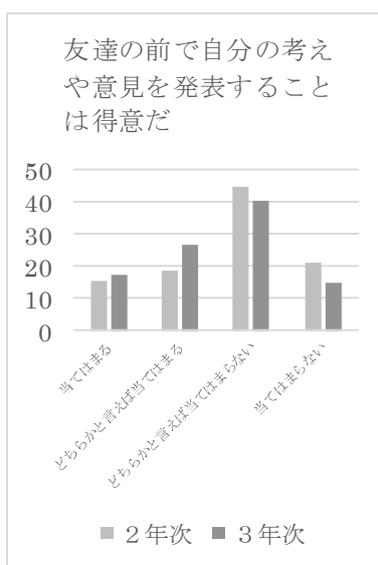
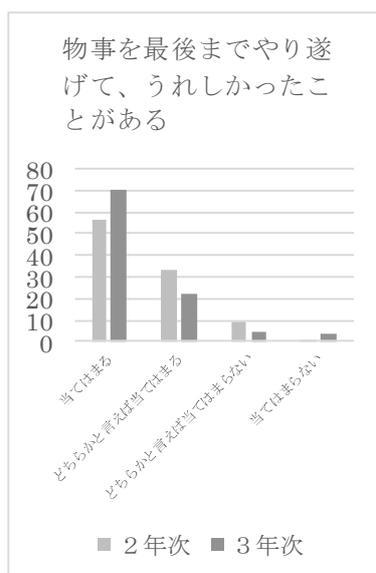
- ・家庭で学校の話をする機会を増やす。

③学習意欲の向上を図る。

- ・目に見える評価による達成感を味わう取組。(数値目標)

4. 平成26年度の取組から ー平成27年度への課題ー

本校は生徒質問紙を全学年で行っている。平成26年度の3年生が2年生だった時との比較から変容をみる。(グラフの単位 名)



<成果>

- ・毎時間の目標を全員で音読する取組を行ったことにより、目標が明確になり、達成感を味わうことができた。
- ・教科部会、相互授業参観等で、言語活動を充実させた授業に力を入れる話し合いが成され、その結果自分の意見を発表することへの抵抗が無くなってきた。

<課題>

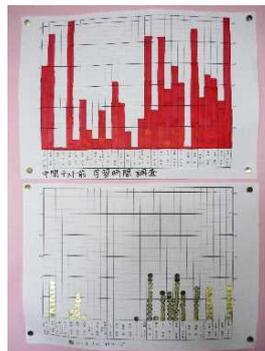
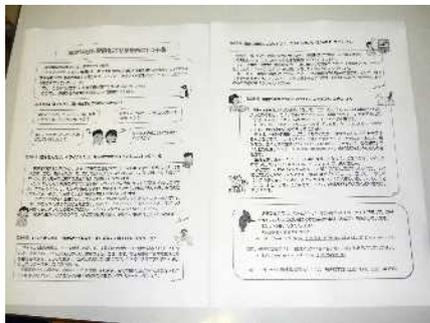
- ・家庭学習への取組を定着させることに課題が残る。「宿題」として出されたものは家庭で取り組むことができるが、自分で考え実行する「予習」となると、なかなか実施できていない。自ら考えることを苦手としている生徒は多く、このことが記述式の問題の無回答率を高くしている要因だと思われる。何事も自ら考え生きる力を養う必要があると考える。

(例)

* 1 ページ学習

教科・単元にとらわれず、「家庭で学習する」という習慣づけを目標にする。
教室にページ数を掲示することで、達成感を味わう。

家庭の協力が必要



1 学年の三者面談で小学校高学年（5・6年生）保護者用「家庭学習のすすめ」リーフレットのの一部を配付。

* 今日の1問プリント

教科担当より毎時間もらうコメントをその時間の復習問題に変更。

1 週間分を学習委員がプリントにし、家庭学習プリントとして配布する。

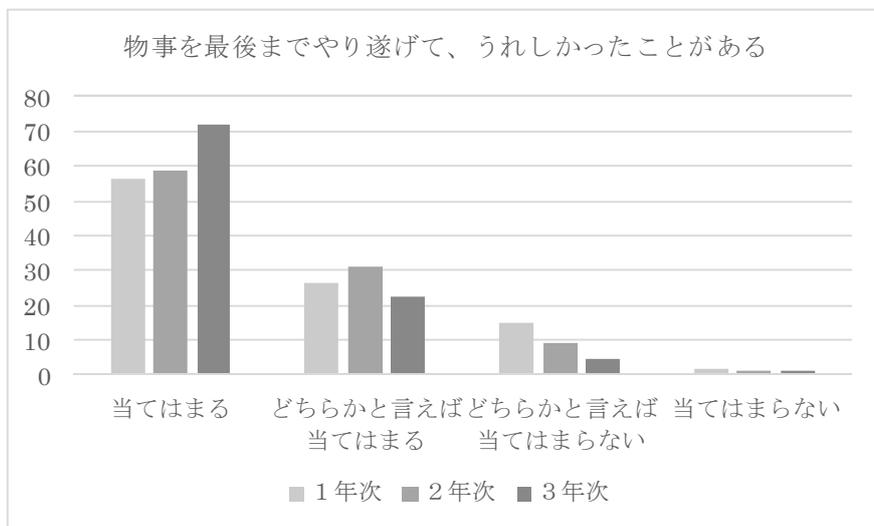
自分たちで作ったプリントを使用することで、意欲化を狙う。



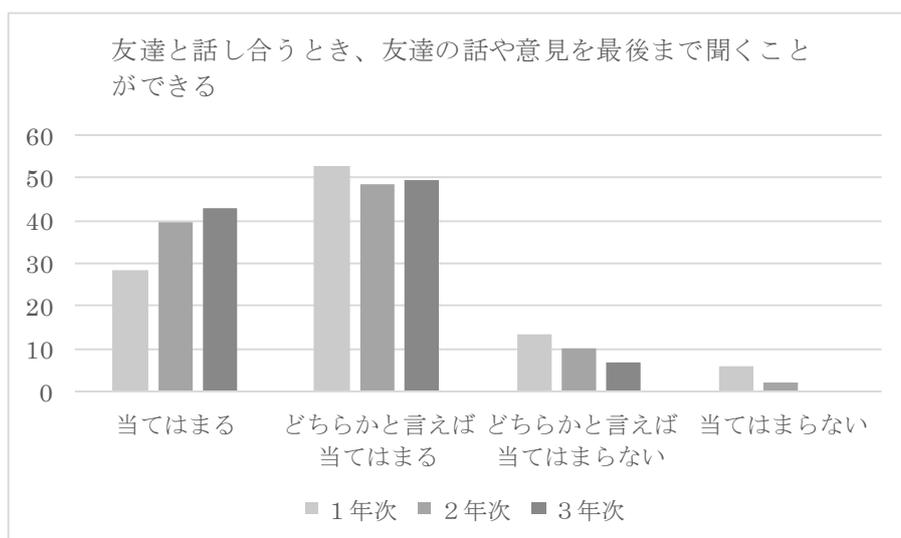
授業の評価		授業の評価	
7月10日 木 3 時間目		7月11日 金 3 時間目	
全体評価	⑤ 4 3 2 1	全体評価	⑤ 4 3 2 1
一言 (褒めた人など)	オバト象の 作者は?	一言 (褒めた人など)	機能持の静 語のこ何と か(オバト)
次回の持ち物	3点セット	次回の持ち物	3点セット
宿題	なし	宿題	オバト象 について

5, 平成27年度の取組

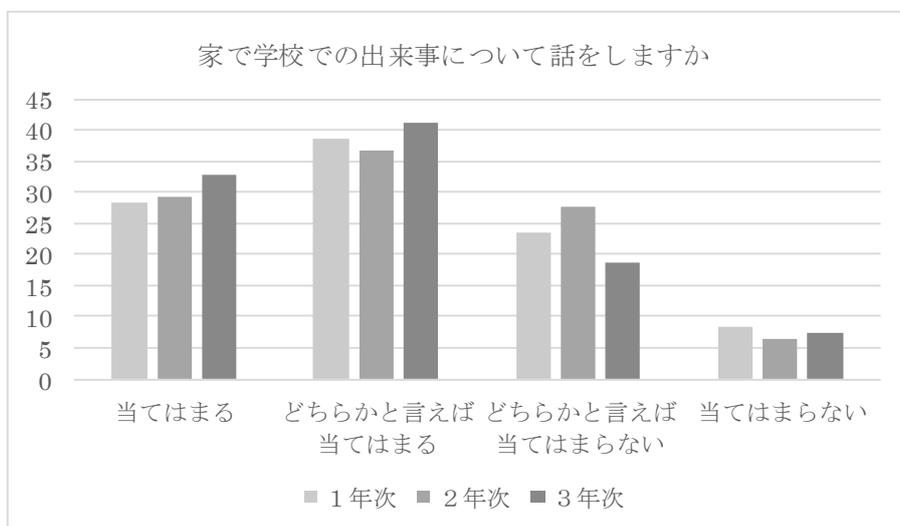
平成25年度入学生（現3年生）の1年次からの質問用紙の結果の比較から変容をみる。



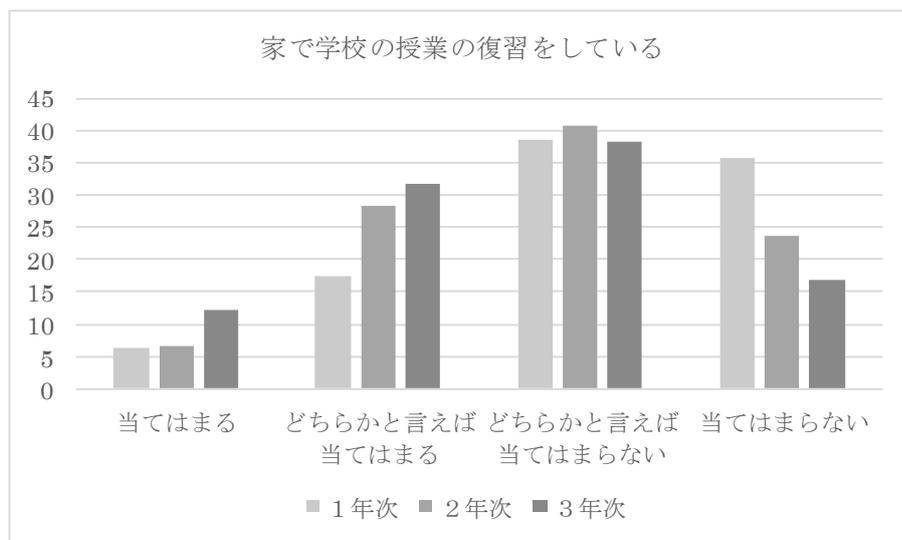
- ・授業の目標の音読
- ・1日の目標
- ・班目標
- ・クラス反省
- ・委員会活動の充実



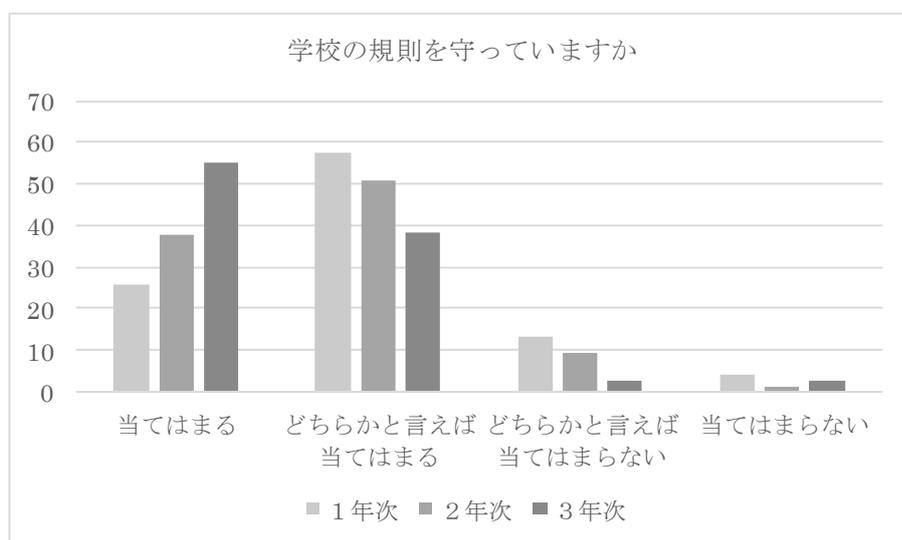
- ・帰りの学活
(班反省、授業評価)
- ・班長会議
- ・クラス反省



- ・学校便りの発行
- ・学年便りの発行
- ・学校メールの配信



- ・ 1 ページ学習
- ・ 授業の評価コメントの復習



- ・ 自治活動
- ・ 生徒会、専門委員会の活性化

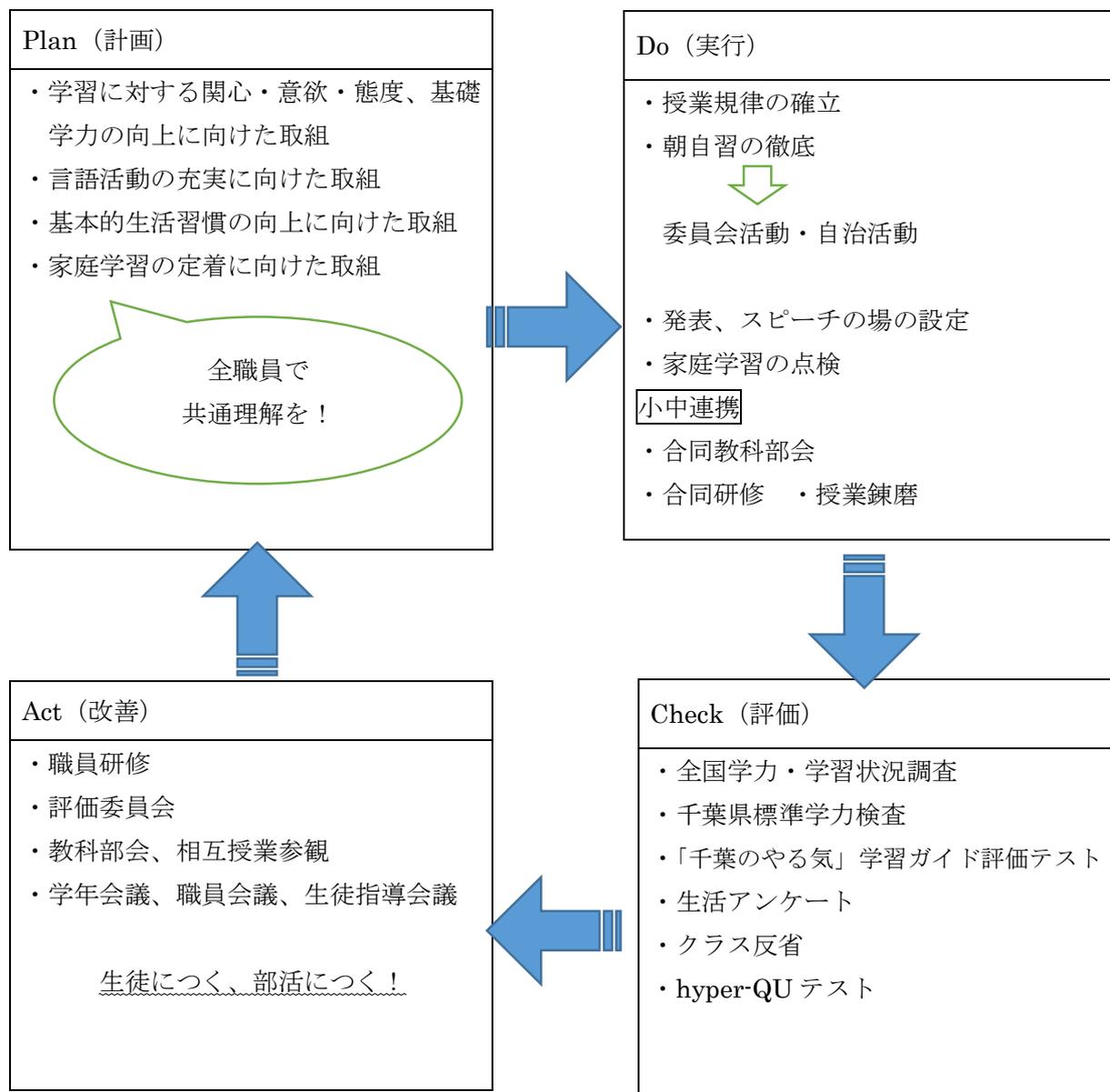
〈成果〉

- ・ 1年次からのデータを残しておくことで、取り組んできた成果がはっきりと出ていることがわかった。
- ・ 生徒の活動が活発になり、教員が前に出て指導する場面が減少した。
- ・ 話し合い活動に意欲的に参加する生徒が増えた。
- ・ 一人の生徒に多くの教員が関わる機会が増えた。

〈課題〉

- ・ 基本的な生活習慣の質問について変化が見られないものが多かった。
- ・ 家庭学習については若干改善がみられたものの、「定着」とまではいかなかった。家庭での学習、授業の復習を確実に取り組ませたい。

ウ、検証改善サイクル (PDCA サイクル)



3 成果と課題

〈成果〉

- ・学習委員が中心となった「授業の約束3箇条」を徹底する取組により、落ち着いて授業を受ける雰囲気が作られ、授業規律が確立されてきた。
- ・クラス反省により、自分たちの生活を評価、反省し、新たな目標を立て実行することで学校生活が安定し、生活習慣の向上が図れた。
- ・朝のチャレンジタイム（朝自習）を充実させることで、学習へ取り組む意欲が向上した。
- ・毎時間の目標を全員で音読する取組を行ったことにより、目標が明確になり、達成感を味わうことができた。
- ・教科部会、相互授業参観等で、言語活動を充実させた授業に力を入れる話し合いが成され、

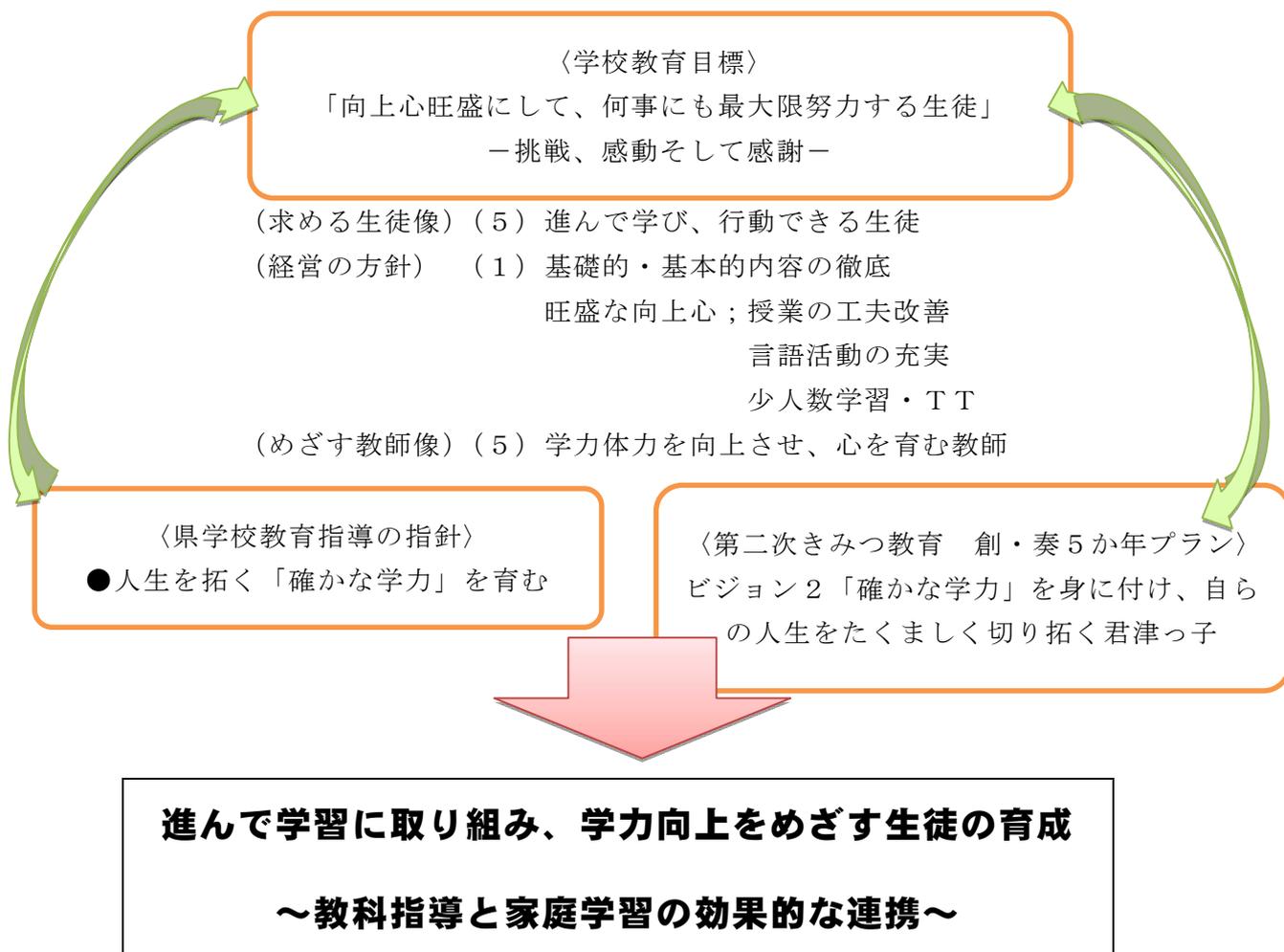
その結果自分の意見を発表することへの抵抗が無くなってきた。

〈課題〉

- ・家庭学習は保護者の協力が不可欠である。学校と家庭の連携を強くし、家庭の教育力を向上させる必要がある。基本的な生活習慣を向上させ、落ち着いた学校生活を送ることで更なる学力向上を目指す。
- ・小学校との連携を進めることで、9年間を通した生活習慣（早寝・早起き・朝ご飯）家庭学習（授業の約束3箇条の徹底を通して）の定着に取り組んでいきたい。

平成27年度「学力・学習状況」検証事業 研究成果報告書

1 研究主題



2 研究の概要

ア 全国学力・学習状況調査の結果における特徴と分析

国語・理科の平均正答率は全国より下回っている。数学Aも全国より下回っているが、数学Bは全国平均に近づいている。

国語、数学・理科とも記述式に課題が見られる。特に、国語では短答式と伝統的な言語文化の部分、数学では資料の活用、理科では短答式、物理的領域に課題が見られる。

日ごろから自分の考えを表現(記述)する機会を設け、課題のある分野については学び直しをする必要がある。

全ての教科で、昨年度と同様に記述をする問題に課題が見られる。

君津市全体としては、資料からどのようなことを読み取り、考えていかなければならないのか、全国学力・学習状況調査の問題を授業で取り入れながら指導をする必要があるとの分析がある。

イ 結果分析から設けた対策・実践内容

①言語活動の充実を通して思考力、判断力、表現力、問題解決力の向上

記述式の問題の低迷を改善するために、書くことに限らず、話すこと、聞くこと、書くこと、読むこと、考えること、想像すること、筋道を立てて推測すること、資料を読み取ること、情報を整理しまとめること、考えを伝えることなどを各教科の授業で実践した。

(学力向上の基盤となる) 学習態度・規律の育成 ※各教室に掲示

話し方5カ条	聴き方5カ条
1. ためらわずに発表しよう。	1. だれもが発表できる雰囲気をつくろう。
2. みんなの方を向いて発表しよう。	2. 仲間の発表を静かに聴こう。
3. 全員に聞こえるようにしよう。	3. 発表する人の顔を見ながら聴こう。
4. 単語だけで言わないようにしよう。	4. 発表する人が何を言いたいのか考えながら聴こう。
5. 結論を先に、理由を後から言おう。	5. わからないことは、その場で聴こう。

②学習課題の提示

学習課題を明確にすることで、生徒に授業のゴールを意識させ、この時間で何ができればよいのか示すことで、学習に対する意欲を高めさせた。

③ちばっ子「学力向上」総合プラン 学習サポーター派遣事業の活用

年間420時間、週3日程度勤務し、授業では特に下位層の生徒への支援や、夏季休業中の補習授業で支援などを行い、生徒からは「丁寧に教えてもらい、わかるようになった」などという声が多数聞かれた。

④家庭学習への連携

生徒は授業でせっかく理解しても、次の授業では忘れてしまうことがある。また、平成27年度の全国学力・学習状況調査の質問紙で、

- ・月～金までの家庭でのゲーム時間が3時間以上と答えた生徒が約25%近く
- ・月～金までの家庭での携帯・スマートフォン使用時間が3時間以上と答えた生徒が28%以上

という結果もあり、家庭で過ごすときの優先順位の課題もあるが、家庭学習で何をしてもよいかわからない生徒もいたこともあったため、授業でわかったことをもう一度思い出せるような機会を授業の中に設定した。

家庭学習はここ 教科書



P. 98 例題2 問3

ワーク

P. 76

※家庭学習で復習するところを授業中、黒板に明示

⑤校内研修の充実

- ・家庭学習ガイドの改訂・配付
- ・全国学力・学習状況調査の分析
- ・若年層教員研修

⇒ベテラン層の授業を参観し、自らの授業も見ってもらうことで授業力の向上を図った。

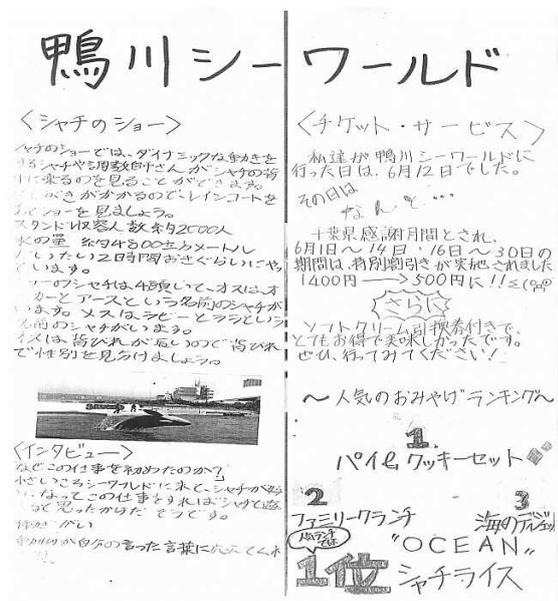
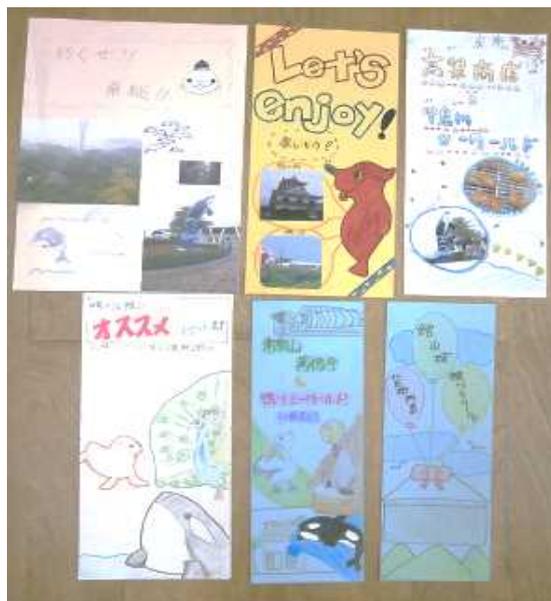
⑥授業の振り返り

- ・南房総教育事務所発行「セルフチェックシート」の活用
週1回授業を振り返り、週案に添付し、授業の改善・工夫を図った。
- ・本校「授業力アップチェックリスト」の活用
本校学校教育目標の具現化のために、5つの視点、7つの原則の観点から授業をチェックした。

⑦全国学力・学習状況調査の分析と対応

- ・記述式の問題に課題
⇒授業の中で、読む・話す・書くなどの言語活動を意図的に取り入れる。

【2学年国語科の実践】校外学習のリーフレットづくり



- ・数学の図形領域に課題
⇒模型を使って、具体的な操作をもとに考える機会を設けるなど、多角的に思考できるように工夫
- ・ゲームやスマートフォンの使用時間
⇒家庭と連携（三者面談、保護者会など）し、家庭での使い方のルールを決めるよう協力を依頼した。

⑧学習規律の徹底

- ・学習道具をそろえさせる
- ・授業中寝かせないで受けさせる

⑨家庭学習ガイドの活用

家庭学習を充実させるために、本年度改訂された家庭学習ガイドをもとに、「家庭学習のための集会」を実施した。

⑩補習授業

夏季休業中に、学習塾に行っていない生徒を中心に実施した。各学年、各5教科2時間程度で、30コマ実施した。

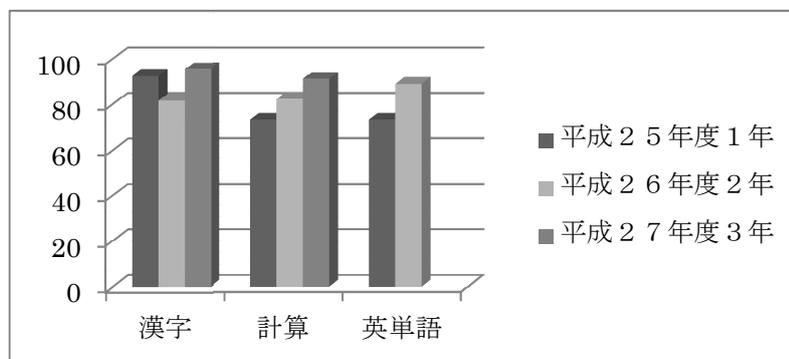
⑪生徒の自治活動による取組

- ・文化委員会主催「学芸コンクール」の実施（学期に1回；1学期漢字、2学期計算、3学期英単語）

【現在の第3学年の経年変化】

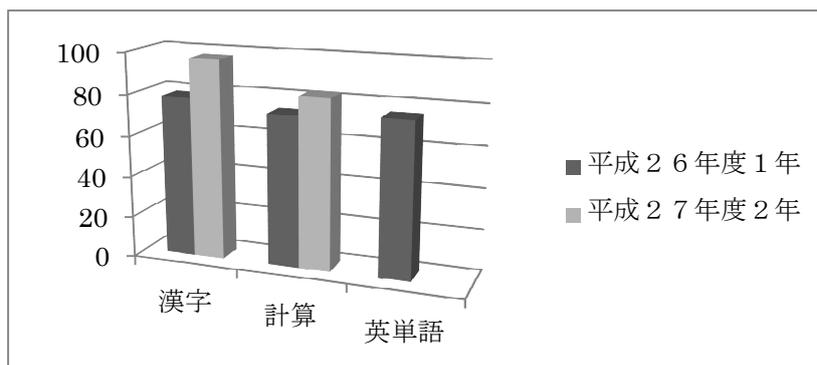
学芸コンクール	漢字	計算	英単語
平成25年度1年	92.4	73.5	73.5
平成26年度2年	81.7	82.6	89.2
平成27年度3年	95.5	91.4	

※英単語については3学期末に実施されるため、未実施



【現在の第2学年の経年変化】

学芸コンクール	漢字	計算	英単語
平成26年度1年	78.2	73.4	75.4
平成27年度2年	97.3	82.6	



・学びタイム

平成27年度から同じく文化委員が主体となって実施。帰りの会5分間を使って、ドリル学習を行った。終わらなかった問題については、家庭学習につなげた。

・学年生徒会の取組「パーフェクトプロジェクト」

生活記録ノート、自学ノートの各学級全員提出を目指した。提出率を学級対抗で競い、月間で優秀な学級を学年集会で表彰した。

・BS（異学年縦割り）活動

定期テスト前に、1～3年生の異学年のグループで、テスト前の学習計画を立案する時間を設定した。上級生からの成功談、失敗談、下級生からの学習に対する質疑応答を通して、学習計画を立てた。上級生の意識高揚（自覚）を図るとともに、下級生の学習カウンセリングを期待して実施した。

ウ 検証改善サイクル

P l a n

- ・学習規律、板書の共通理解をする。
- ・授業の中で家庭学習につながるようにする。
- ・T・Tや学習サポーターのよりよい活用を図る。
- ・家庭学習ノートを毎日提出させ、点検する。
- ・帰りの会の時間に「学びタイム」を設定する。
- ・生徒会活動に学力向上の取り組みを組み込む。

D o

- ・板書の共通理解はできたが、学習規律についてはさらに徹底していく必要がある。
- ・家庭学習の提示はしている教科と提示できていない教科もある。
- ・T・Tや学習サポーターにより意欲的に学習する生徒が増えた。
- ・家庭学習ノートの提出については、生徒会活動により100%になる日が多くなった。

A c t i o n

- ・家庭学習が充実していない生徒へ支援する。
（補習、加配教員・学習サポーターの活用）
- ・家庭学習ガイドの効果的な活用方法の検討・実行をする。
- ・県標準学力検査の結果をもとに、授業の改善を図る。
- ・言語活動や思考力・判断力を積極的に取り入れた授業構成と、授業で家庭学習につなげることを徹底する。

C h e c k

- 平成27年度の全国学力・学習状況調査の結果から
- ・国語、数学、理科とも記述式に課題が見られる。
 - ・国語では短答式と伝統的な言語文化の部分に課題がある。
 - ・数学では資料の活用に正答率が低い。
 - ・理科では短答式、物理的領域に課題が見られる。

P l a n	4～5月	校内研修、職員会議等で年間の取組計画・内容を確認
D o	6～3月	各担当、関係職員が組織的に実施
C h e c k	8～3月	全国学力・学習状況調査、各種テスト・検査、アンケート
A c t i o n	9～3月	各取組に対する課題・分析をもとに改善

3 取組の成果と課題

(1) 成果

- ・授業での学習規律は年次を追うごとに改善されている。授業で教員が意識して指導することと、生徒の自治活動の両面から取り組んだことが成果として挙げられる。
- ・授業において、T・Tや学習サポーターによる支援によって、学習意欲が低くなりがちな下位の生徒が1時間あきらめずに学習しようとする姿が多く見られた。
- ・学芸コンクールの結果にみられるように、「短期的」で、「範囲が限られている」というような内容で、生徒どうしの切磋琢磨がある取組は、自分や自分たちのグループの成長がわかりやすく、成果が上がった。
- ・生徒会活動の一環として、生活記録ノートや自学ノートの提出を呼びかけることで、生徒自身の意欲を喚起でき、100%の提出率になった日も多かった。

(2) 課題

- ・授業での板書については、学習課題の明示や学習過程に応じた配色（課題は青、まとめは赤など）は徹底できたが、授業で使う道具をきちんと揃えさせたり、毎時間家庭学習につなげるような示唆ができていなかったりする授業もあった。
- ・T・Tや学習サポーターは積極的に生徒に関わり、学習支援をすることができたが、本校の実態に合ったより実効的な活用方法をさらに模索する必要がある。
- ・全国学力・学習状況調査での記述式の問題への改善のために、授業で言語活動を意識しているが、用語の意味をはじめ、基本的な知識が不足している生徒には、ハードルが高い。生徒がわからない状況のときに、「わからないので教えてほしい。」と素直に言えるような学級経営も素地として必要であると考えられる。
- ・家庭学習を推進するために、授業と家庭学習の連携や、学びタイムからの連携、家庭学習ガイドの改訂・配付と集会を行ったが、効果は大きいとはいえない。家庭での生活時間を有効に使えない要因として、携帯・スマホやゲーム、テレビ等に多くの時間を費やしていることがあげられる。家庭と協力体制をつくるとともに、生徒自身が自覚を持ち、学習する意義が感じられるよう指導していく必要がある。